練習女子國語讀本

改訂版

巻二

4b
810
邢13

42357

教科書文庫

4
810
42-1938
20000
71945

資料室

昭和十三年二月五日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

46
810
B813

純正女子國語讀本

文學博士 芳賀矢一 編

早稲田大學出版部

廣島大學
教
71945
図書

廣島大本營軍務御親裁
（明治神宮聖德記念繪畫館壁畫）

侍從武官長　岡澤　精

明治天皇

參謀次長　川上操六

資料室

昭和十三年二月五日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

46
810
B13

文學博士 芳賀矢一 共著

純正女子國語讀本

早稲田叢書出版社

廣島大學
教
71945
図書

廣島大本營軍務御親裁

（明治神宮聖德記念繪畫館壁畫）

參謀次長　田上將次

陛下天皇

侍從武官長　岡澤將

（陛下師宮聖廟詣念餘畫論學畫）

黃島大本營軍議喻聯隊

廣島大本營軍務御親裁

明治大帝は、日清戰爭に際し、宣戰布告の翌月卽ち明治二十七年(一五五四)九月より媾和條約の結ばれた翌年四月まで、八ヶ月の長い間、廣島第五師團司令部を大本營として、煩劇な非常時の軍務を日夜御親裁遊ばされた。御座所は師團司令部の木造洋館二階の極めて簡素な一室で、そこが御寢所でもあり、御休息所でもあつた。

本圖は、深夜蠟燭の光の下に戰況を聞し召さるゝところ、奏上してゐるのは時の參謀次長陸軍中將川上操六、右手に畏つてゐるのは侍從武官長陸軍中將岡澤精である。明治神宮聖德記念繪畫館にある壁畫の一つで、舊廣島藩主侯爵淺野長勳の奉獻にかゝるもの、筆者は廣島縣出身の南薰造氏である。

卷二　目次

一　現つ神明治大帝　その一　編者　一
二　現つ神明治大帝　その二　編者　八
三　現つ神明治大帝　その三　編者　一七
四　感激の日章旗　布利秋　二三
五　野菊（詩）　島木赤彥　三〇
六　トマト　茅野雅子　三二
七　小春の岡　長塚節　四〇
八　ふるさと（和歌）　石川啄木　五〇

九 樂聖ベートーヴェン　牛山充　五三
一〇 月の旅（詩）　柳澤健　六六
一一 仙人と石　薄田泣菫　六八
一二 元七黑七鳥　編者　七八
一三 茹栗　編者　八五
一四 たき火（詩）　八九
一 たき火　葛原茵　八九
二 寒雀　川路柳虹　九〇
一五 冬の雪國　編者　九二
一六 初孫　國木田獨歩　一〇三
一七 母を頌ふ（詩）　西條八十　一二

一八 婦人團體の母　小野賢一郎　一二四
一九 美しき國民性　芳賀矢一　一三五
二〇 紋所の話（講演）　澁田頼輔　一三四
二一 雛人形　西澤笛畝　一四七
二二 御修學時代の皇后陛下　大島義脩　一五四
二三 春の草（詩）　三木露風　一六四
二四 愛犬ポチ　長谷川二葉亭　一六六
二五 世界無二の我が國體　下田歌子　一七四

純正女子國語讀本　卷二

一　現つ神明治大帝　その一

明治天皇御代知ろしめすこと四十五年、その間に於て我が國運は前古無比の興隆を見た。これ偏に廣大無邊なる陛下の御德の賜であるといはねばならぬ。

天皇の御德は、實に日の如く、神の如く、光の如く、慈雨の如しと申し上げてもよい。天皇は幼くして御位に卽かせられ、國難の續き起る間に處して、連綿不斷に驚くべき努力の

天皇の御德は、實に日の如く、神の如く、光の如く、慈雨の如しと申し上げてもよい。

聞(間)

積—績

民の父母てふ古言をそのまゝ躬行して、億兆と苦樂を共にせさせられた。

修養を積ませられた。天津日嗣の御子たる事を深く御自覺ましまして、圓滿なる帝王の御氣象を備へさせられた。民の父母てふ古言をそのまゝ躬行して、億兆と苦樂を共にせさせられた。

明治大帝

萬機總攬。

攬—纜
操—繰

ねさせようとつとめさせられた。萬機總攬の大御舵を慎重に無理なく操つて、國家、國民を危險なく光明の理想地に

日月を理想として世界萬國に一視同仁の眦を向けさせられた。

もがな

導かうとつとめさせられた。日月を理想として世界萬國に一視同仁の眦を向けさせられた。その御慈しみはあまねく無心の生物にも及んだ。天皇御一生の御詠歌は十萬首に餘り、その一々が陛下の大御心そのまゝの表れであるが、これを拜しても、陛下の御盛德が偲ばれる。

あさみどり澄みわたりたる大空の
　ひろきをおのが心ともがな
さしのぼる朝日の如くさわやかに
　もたまほしきは心なりけり
わが心いたらぬくまのなくもがな

このよを照らす月の如くに
いそのかみ古きためしをたづねつつ
新しき世の事もさだめむ
たひらかに世は治りて國民と
ともに樂しむ春ぞうれしき
花見つつあそぶ春日におもふかな
たがへす民のいとまなき世を
照るにつけ曇るにつけて思ふかな
わが民草の上はいかにと
民のため心のやすむときぞなき
身は九重のうちにありても

いそのかみ古きためし。
む(ん)
ぞうれしき
わが民草の上はいかに。
九重のうち。

戰ひの場のおとづれいかにぞと
ねやにも入らず待ちにこそ待て
いたで負ふ人のみとりに心せよ
にはかに風の寒くなりぬる
よきを取り惡しきを捨てて外國に
おとらぬ國となすよしもがな
よもの海皆はらからと思ふ世に
など浪風のたち騷ぐらむ

こそ待て
とつくに
おとらぬ國となすよしもがな。
よもの海皆はらからと思ふ世に。

天皇の數知れぬ偉大なる御行跡の中で、殊に有難きは、民草に對する厚き思ひやりの大御心であつた。陛下は侍臣

勸—勤
聽…聞

詠寄國祝歌
あらたまのとしをむかへてよろづたみひとつこころにくにいはふらし
崩—崩
畫(畫画)
體(一体)

等の御避暑、御避寒を御勸め申すのに對して、曾て御聽き入れ遊ばされたことがない。そしてそれが、兵士や農夫等の勤勞に對する厚き御同情と、國費を節したまふ思召とによつたことは、

詠寄國祝歌

あらたまのとしをむかへてよろづたみひとつこころにくにいはふらし

明治天皇宸筆

年年におもひやれども山水を
汲みて遊ばむ夏なかりけり

の御製によつても拜察される。また崩御の少し前、東京の近縣に於て陸軍大演習を行ふ計畫があつて、陛下には、玉體御安泰のため、日々演習地から宮城に還御あるやうに御願ひいたしたところ、い

歸(帰)
努力勵精の御修行。
石黑忠悳(たゞのり)
退役陸軍軍醫總監、子爵、元樞密顧問官。新潟縣の人。弘化二年生。

つまでも御許可がなかつた。その中に期日が迫つたので、取急ぎ御裁可を願ひ出でると「兵士どもは日々營舍には歸らぬであらう、朕一人が宮城に歸るのでは、統監のかひがあるまい。」と仰せられたので、恐懼して、演習地に御宿泊を願ふことに改め、始めて御裁可が下つたといふことである。

明治天皇は實に偉大なる帝王の天資を具へさせられた上に、更に努力勵精の御修行を積ませられた名君であらせられた。我等はその御偉德、御仁慈の最もよく纏つて現れた一節として、子爵石黑忠悳氏の謹話の一節を引くことにする。

明治二十七八年（一八九四―一八九五）
衛（衛）
箇（個）
大帝に咫尺し奉るの光榮を得た。恐懼感激に堪へぬ。
堪へ―絶え。
澤（沢）
扈從。
著（着）

二　現つ神明治大帝　その二

石黒子爵は言はれる。

明治二十七八年の日清戰役に際して、私は野戰衛生長官の役目を承り、凡そ一箇年間、廣島の大本營に於て、明治大帝に咫尺し奉るの光榮を得た。その一年の間、日々御側に奉伺して、拜見し、拜聞して、誠に恐懼感激に堪へなかつたことが澤山ある。

九月の十五日、廣島に御着きになると、私は停車場から扈從して、大本營へ行つて、二階に上つた。見ると、廊下の向う

向う（ひ）
又ハ向ふ
座―坐
奉伺。
ございません
屏（屏）
臺（―台）

に扉があつて、大帝はそこから入御になつたが、やがて御部屋の中なる玉座の御椅子に御掛けになつた。私は恭しく御前に出て御機嫌を奉伺した。

それから各室を一應檢分しようと思つて、案内者を連れて廻つて歩いた。

「御寢所はどこか。」

私はまづ尋ねた。案内者は答へた。

「御寢所と申して別にございません。」

「どうして御寢み遊ばすのか。」

と、重ねて尋ねると、

「御座所のうしろに立ててある、あの御屏風の陰に御寢臺

がありまして、御寢みになる時には玉座を他に移して、かはりに御寢臺を置き、御屏風で圍んでそこに御寢みを願ふことになつて居ります。」

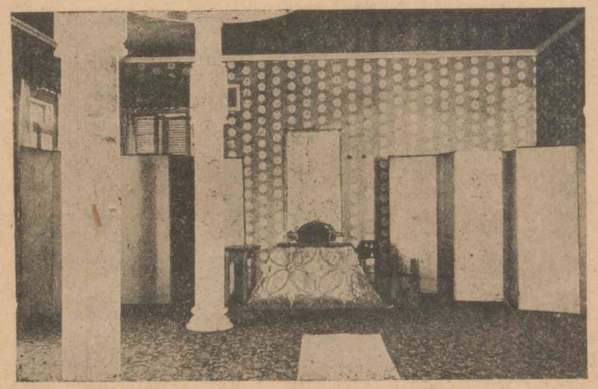
と答へた。御座所も御寢所も一つだといふのである。私は驚いた。

「では御休息所は？」と尋ねると、それもないといふ。

私は愈恐懼に堪へなかつたので、よく聞き糺して見ると、先日、既にくはしい圖面を以て、宮内省を經て奉伺の上、右の通り定めたといふのである。いかに戰時の行在所であるとは申せ、畏くも至尊の御身を以てして、御寢所も御休息所もないとは、何といふ畏れ多いこと

圍（囲）
聞き糺す。
圖（図）
經（経）

であらう。私は感極まつて涙を呑むより外なかつたのである。



廣島大本營の玉座

この御座所は斯樣に手狹な上に、御室の御備へ品としては、不斷御掛けになる御椅子一つと、臣下に座を賜はる時の椅子が三つあり、御前には卓子一脚と御寢臺、御書物の御箪笥と御屏風が二雙あるだけで、他には何の御裝飾もないといふ、極めて簡略なものであつた。そこで宮内省の人が、これでは如何にも御窮屈で畏

感極まつて涙を呑む。
狹（挾、鋏、俠、峽）
斷（断）
卓子一脚、屏風二雙。
雙（双）—隻

大御心の忝さを拜し奉る。

季―李

れ多いから、たまには御休息遊ばすために安樂椅子を御室に備へてはといふので、御意を伺ふと、大帝は、

「戰地には安樂椅子が備へ付けてあるか。」

と仰せられた。

この御一言に大御心の忝さを拜し奉つた宮内官は、ひたすら恐懼して、遂に安樂椅子さへも御室に入れることを差控へたのである。

大帝は二十七年の九月から翌年の四月まで、八ヶ月の長い間をこの御座所に過ぐさせられたのであるが、殊に酷寒の季節に暖爐の備付まで斥けさせられて、四十二疊敷の御室に僅か火鉢二つで御凌ぎ遊ばしたといふのは、何といふ

在…有

これは畢竟、國民と辛苦を分たせらるゝ大御心に外ならなかつた。

同じう。(く)

溫(温)

畏れ多いことであらう。これは畢竟、大本營の御座所に在らせられても、テントやバラックの内にあつて、寒氣と戰ひつゝある將卒と苦しみを同じうし給ひ、また一般國民と辛苦を分たせらるゝ大御心に外ならなかつたのである。

大帝は非常に御嚴格にあらせられたけれども、その間にまた何ともいへぬ御溫情があらせられた。その年の十月二十五日のことである。私は戰地を一巡して來いとの仰せを蒙り、直

廣島大本營

發(発)赴…趣
際—察、擦、祭
態—熊
洲…州
憶—臆、億

ちに廣島を出發して戰地に赴き、各地を視察して、十一月二十四日の夜、廣島に歸つて來た。　さうして翌日の御軍議の際、視察先の將卒の健康狀態、士氣、氣候、物資の過不足、運輸の便否等について詳細に奏上したが、奏上し終ると、まづ第一に御下問になつたのは、朝鮮及び滿洲に出て居る軍隊の糧食に就いてであつた。

「飯は朝鮮米か、日本米か、それとも支那米か。」

かういふ御尋ねに對し奉つて、苟もあやふやな事は申し上げられぬ。　記憶して居る事でも、尙ほ念のために調査した上でなくては御答へが出來ぬ。　それで、私は一々手帳を見て、たとへば、

壞—壞
交ず。
審かに言上。
齒(歯)
腸(腸)
重ねての御下問である。
かわかす

「平壞に居ります兵は、朝鮮米を食べて居ります。　義州に居る兵は、朝鮮米と日本米とを交ぜて食べて居ります。」

といふ風に、審かに言上した。　さうすると、

「朝鮮米には砂が澤山混つて居るといふことを聞いて居るが、その朝鮮米を食べて居る兵が、齒を痛めるとか、腸胃を壞すとかいふことはないか。」

と、重ねての御下問である。　私は實に恐れ入つた。　そしてかく御答へ申し上げた。

「朝鮮米を食べては居りますが、その飯には砂が混つて居りませぬ。　凡そ朝鮮米に砂が多く混つて居りますのは、朝鮮では稻を刈ると、陸田ならば直ぐに地上で乾かし、水

田でも乾田の上に乾かして置いて收穫を致しますから、その間に砂が多く混るのでございます。しかし朝鮮で飯を炊きますには、内地の如き米磨桶を用ゐずに、くり鉢で米を磨ぎます。そのくり鉢の底には、轆轤で渦卷が彫り付けてありますので、それに米を入れ、水を入れて磨ぎますと、砂は重いので皆渦卷の中に入つてしまひますから、自然に除かれます。隨つて飯には砂が混りません。どうぞ御安心遊ばすやうに願ひ上げます。」

と申し上げて、彼地から特に持ち歸つた渦卷のある米磨鉢を鞄から取出して御覽に入れたところ、陛下も御安堵遊ばしたか、大層御機嫌麗しく拜せられた。

穫—獲
磨—摩
覽(覧)
堵—睹、賭
御機嫌麗しく。

三　現つ神明治大帝　その三

これも同じくその戰地巡廻の折の話であるが、私は十一月二日に朝鮮の漁隱島を出帆して、翌日兵站司令部のある兀浦に着いた。そこの司令官は陸軍少佐山縣俊信君であつた。私はそこの巡視を終へて、直ぐさま出發しようとすると、山縣司令官が引きとめて言ふのに、

「暫くお待ちを願はれますまいか。實は現在こゝに、將校、下士卒から軍夫まで加へて八十三人居りますが、正午にはそれらが全部山の上に登つて、盃を擧げて天長の佳節を祝し、陛下の萬歳を唱へたいと存じてゐたところであ

漁隱島　朝鮮南部の島。
兀浦　朝鮮南岸にある町。
天長の佳節。明治天皇の御誕辰、十一月三日。

音頭を取る。
戴—戴
構—搆、媾、講
酒が一樽、鏡を拔いてある。
裂—烈
堆—推、椎
はたと困つた。
腎—賢
拍—柏
佑—祐

ります。「そこへ閣下の御來臨は願つてもない幸ですが、どうか一つ音頭を取つて戴きたい。」

といふのである。私も大いに喜んで、

「それは結構な事ぢや。此方から願つても致したい位で。」

と答へた。それから十一時に、司令官と一緒に山の上に登つて見ると、兵站部で用意した酒が一樽、鏡を拔いてある。またその傍には、燒鰯を裂いたのが笊に堆く盛つてある。が、肝腎な盃がない。司令官は、これを見てはたと困つた。私も氣の毒に思つてゐると、司令官が俄かに手を拍つて喜んで、

「いや天佑々々。濱邊へ行くと牡蠣の貝が澤山ある。——

屈竟の盃。
拾—捨
暫—漸
駈=驅
一同の視線は悉くその軍夫に集つた。

閣下、屈竟の盃が思ひつきました。」

と言つて、直ぐに從卒をやつて蠣殼を拾はせた。暫く經つと、二人の從卒が笊に一杯づつ、きれいに洗つた蠣殼を持つて來た。

その時はもう十二時に近くなつたので、一同山上に整列してゐると、麓から一人の軍夫が、

「お待ち下さい。お待ち下さい。」

と言つて駈け上つて來たが、見れば手に日の丸の旗を持つてゐる。一同の視線は悉くその軍夫に集つた。どうしたのかと怪しんでゐると、彼はやがて私の前に立ち、その日の丸の紙旗を差出して、

捧―棒、俸

驚くではないか、半紙に梅酢で紅く日の丸が染めてあつて、ところ〴〵にまだ紫蘇の葉が附いてゐる。

「閣下、これで音頭を取つて下さい。」

と言つた。私は直ぐにそれを受取つて、高く捧げつゝ、日本の方に向つて、恭しく「天皇陛下萬歳！」を三唱した。一同はこれに和した。それから皆飲め〳〵といつて、牡蠣の貝で盛んに祝盃を擧げた。

その時振つた旗を、あとになつてよく見ると、驚くではないか、半紙に梅酢で紅く日の丸が染めてあつて、ところ〴〵にまだ紫蘇の葉が附いてゐる。それを飯粒で細い竹に貼りつけたのである。私はその牡蠣の貝と梅酢の旗とを鞄の中に入れて持ち歸つた。

さうして大本營に於て、陛下にこの事を奏上して、その二

じ(ぢ)つと

いらせられ

川上操六　當時參謀次長兼兵站總監。

寺内正毅　當時野戰運輸通信長官。

野田豁通　當時野戰監督長官。

岡澤精　當時侍從武官長。

ひしと胸を打たれた。

尋(尋)

品を取出して御覽に入れた。すると、大帝はじつとそれを御覽になつていらせられたが、そのうちに畏くも御眼に涙を御催しになつた。それを拜して、御前に畏つてゐた私は勿論、川上も、寺内も、野田も、岡澤も、皆感極まつて泣いた。

梅酢で旗を染めて聖壽を千里の外で祝し奉るといふ民があるのは、これを御覽になつて御涙を催し給ふ君がおはすからだと、私はその刹那に、ひしと胸を打たれたのである。

それから、まだ恐れ入つた事がある。ちやうどこれらの事を奏上し終つた時である。陛下は突然、

「その司令官の山縣といふのは、あの西南の役の山縣か。」

と御尋ねになつた。私は、

殊勳。

敍（叙）

何といふ有難い畏れ多いことで

「いかにも仰せの如く、西南の役に殊勳のありました山縣俊信でございます。」

と御答へ申し上げた。これは山縣があの戰役に殊勳があつたので、特に勳四等に敍せられたのを御記憶あらせられての仰せである。西南の役以來十八年、當人は既に退役してゐたのを、この戰爭で召集されて、兵站部司令官となつて出征したのであるが、大帝は今や卒然として「それは西南の役の山縣か。」と御下問あらせられたのである。恐れ入ると共に驚き入らざるを得ないではないか。いくら軍功があつたにせよ、一大尉の名を十八年間も御記憶になつていらせられるといふことは、何といふ有難い畏れ多いことであらう。その晩、私は山縣に長い手紙を書いて、この君恩の忝さを傳へた。……

これが石黑子爵謹話の大要である。我々は大帝の御君德、御仁慈に對して、實に言ふべき言葉を知らぬ。

あらう。

布利秋　旅行家、隨筆家　愛媛縣の人　明治二十二年生　一九二三年　大正十二年（一九二三）

ガリチヤ　ポーランドの南部地方。

峰＝峯

四　感激の日章旗

布利秋

時は忘れもしない、一九二三年の十一月三日であつた。ガリチヤの山中には、二百メートルの谷底に大都會があるといふので、それが見たさに、わざ〳〵この東ガリチヤまでさまよひ來たのであつた。

來て見ると、ガリチヤ連峰が晩秋の紅葉に包まれ、山々の

油繪を眺めるやうな絶景。

三哩　約五キロ。
薄—簿
密—蜜

町らしいものがちら〳〵する。

尖頭には眞白に雪がかぶさつて、油繪を眺めるやうな絶景である。

その日はちやうどザビエといふ田舍町に通ふ乘合のぼろ馬車に乘り合はしたが、途中に斷崖からくづれ落ちた岩石のために「通行止」になつてゐる所があつたので、そこから臨時に引返すことになつた。けれども私はザビエの町がもう三哩ばかりだと聞いたので、たゞ一人薄暗い密林の中の細路をテク〳〵とあるいて行つたが、やがて密林を通りぬけると、うねつた道の長くつゞいた廣い野原に出た。見ると、遙か向うに、煙の立つてゐる町らしいものがちら〳〵する。

忘—怠

ショック　感動。

見よう。

あ、あれがザビエの町であらう！　かう思ふと、今までの疲勞をすつかり忘れ去つた氣分になつた。それから白樺のまばらに立つてゐる細道を元氣よく進んで行くと、一軒の藁家の庭先に日章旗の翻つてゐるのが目に映つた。私はそれを見た瞬間、胸がドキンとするほど強いショックを受けた。かういふ野原の、しかも異國の片田舍で日章旗を見ようなどとは、夢にも期待しなかつたからである。それに

ガリチヤの高原

久しく日章旗に飢ゑてゐた。
飢ゑ。覺え。
だらう。
叫(叫)

私は、久しく日章旗に飢ゑてゐた時ではあるし、あまりのなつかしさに、覺えず涙が頬を傳つてゐるのに氣がついた。同時に私の足は、いつしかその日章旗の飜つてゐる小家の方へ急いでゐた。

いつたいどうした日章旗だらうと、いろ〳〵な疑問が私の頭の中を往來するうちに、私はもう小家の前に來てゐた。そして夢中で家の中に飛び込んでしまつた。すると薄暗い部屋の中から、

「あッ！　ジャポンスキー！」

といふ叫が起つたではないか。同時に一人の老人が飛び出して來て、私の體にしつかりと抱きついたではないか。

あとずさり
あらう。
湛—堪
日露戰爭　明治三十七年(一九〇四)—同三十八年(一九〇五)。
ステッセル　當時ロシヤの旅順要塞司令官。

私はあまりの意外に覺えず後退りした。「何のための日章旗であらう。このガリチヤの山中で。しかも明治天皇の御誕生日に於て。しかも見ず知らずの日本の旅人に、この片田舎に住む外國の老人が飛び出して來て抱きつくとは。」

——私は怪しみつゝ、早速老人に說明を求めた。

老人はポーランド人で、我が明治天皇の御誕生日を忘れることの出來ないゆかりを有つ者であつた。彼は老眼に涙を湛へながら物語つた。

私は日露戰爭の當時、ステッセル將軍の配下だつた者です。旅順口が陷落すると、私は日本軍の捕虜となりました。捕虜となるまでは、我々の間にいろ〳〵な噂が飛ん

伊豫の道後　松山市外の溫泉場。

賓（賓）

俘―浮

ようす。

で、今にも手足がバラ〳〵に切斷され、耳も鼻も削がれるかのやうにびく〳〵してゐましたが、扨いよ〳〵捕虜になつて、伊豫の道後といふ名所の溫泉地に收容されてみると、噂とは大違で、われ〳〵一行は、まるで國賓のやうな身に餘る待遇を受けました。そしてしみ〴〵と日本人の立派な道德を知ることが出來たのでした。殊に私は俘虜生活中に、國に殘してある老母危篤の報知を受けて、自分だけが特に他の仲間より先に歸國を許されたのでありましたが、これは全く限りなきミカドの御仁德によるもので、忘れようとしても忘れられぬ感激でありました。その時も私はたゞ夢中になつてミカドの萬歲を叫

四方山の話

エピソード挿話

んだのでありましたが、それ以來年々十一月の三日が來る毎に、その日を待ちつけては、この通り日章旗を掲げて、遙かに大日本のミカド陛下の御仁德を偲び奉つてゐるのです。

聽き終つて、私は覺えず全身が痺れるばかり感激に打たれたのを感じた。／主客はやがてくつろいで四方山の話に興じた。海外萬里の地で、十一月の三日に、はからず日章旗を拜む。そして明治天皇の御仁慈に泣く外國の老人に心からの茶菓を振舞はれる。私はこれを一生に二つとはない大切なエピソードとして、胸の中にたくはへてゐるのである。

島木赤彦
本名久保田俊彦。歌人。大正十五年歿、年五十一。

五野菊

島木赤彦

野菊の花を見てゐると、
水の流れる音がする。
野菊の原のくぼたみに、
泉が湧いて居りました。

野菊の花を見てゐると、
こほろぎの鳴く聲がする。
野菊の原の草の根に、
蟲がかくれて住みました。

蟲（一虫）

野菊の花を見てゐたら、
雲が通つて行きました。
空に浮かんで行く雲の、
影が花野に動きます。

蟲と泉の音のする、
野菊の原はしんとして、
雲の通つた大空は、
いよいよ青くなりました。

（『赤彦童謠集』）

茅野雅子
歌人
茅野蕭々氏夫人
大阪の人
明治十三年生

老い。

六　トマト

茅野雅子

ベルリンにゐた時のことである。私達夫婦が間借をしてゐた家は、南へ向いた部屋が三つあつて、その廣い二つを私たちが使ひ、一つにはお主婦さんの弟の會社員が住んでゐた。

私と同年輩のお主婦さんは、北向きの暗い部屋に老いた犬と一緒にゐるのであつた。夕暮にはこの四人が一緒に私たちの廣い部屋へ集つて御飯をいたゞいたが、晝は大概弟の部屋でしたゝめた。これは變化を求めるためでもあつたが、私とお主婦さんと二人きりになることが多いので、

（又、こぢんまり）

その小さい部屋の方がこじんまりとしてよかつたからである。そこにはピアノもあつたが、小さい露臺のついてるのが一番私を喜ばせた。

ベルリンのこの街ではよく見かける風景であるが、こゝの露臺も鐵柵の上に細長い木箱に土を盛つたものを置いて、それにベコニヤや金蓮花なんかゞ蒔いてある。夏になると、それが一ぱい花をつけて露臺の鐵柵が花で縁どられる趣向である。洗練された趣味ではないが、田舎じみてゐて獨逸らしい感じがする。その露臺の片隅に一メートル四方位の箱に同じやうに土が入れてあつて、それにトマトが植わつてゐた。尤も私がそれを知つたのは可なり後の

やう。
植わつて
尤…最

棒—捧

ことで、その時はもうトマトの木は大分大きくなつて黄いろい花がつき始めてゐた。何故かといふと、まだ外國生活に馴れない私は、日本人らしいつゝましさから、招かれもしないのに硝子の二枚の開き戸をあけて露臺へ出るのは、何となく遠慮されたからである。

ところがある日の食後、それは少し暑くて風の欲しいやうな日であつたが、お主婦さんは私をその露臺に誘つてくれた。日は當つてゐるが、風があるからといふのである。私がそのトマトを見つけたのはその時である。木は二本あつたが、いづれも枝が伸びるまゝに伸びきつて、それがコンクリートの壁に立てかけた棒に一ぱいからみついて、風

亂(乱)

も通らないほどになつてゐる。私はその放任されたまゝになつてゐるトマトの亂雑な姿を見て、思はず微笑まずにはゐられなかつた。

「おわかりになつて？　これはトマトですよ。」

とお主婦さんが少し得意さうに言つた。私の微笑を誤解したらしい。

「さうですね、こつちはベコニヤでせう。」

と私は話をほかへ向けた。その位の話は私にも出來るやうになつてゐた。しかしトマトをこんなに放任して置いては駄目だ。もつと枝をすかさなくてはといふやうなことは、私にはとてもドイツ語では言へないからである。

横暴に茂つてゐる。
絲（一糸）

止…留

さう。
もう私には手がつかない。

それから私は晝食後よくこの露臺へ出た。その度に横暴に茂つてゐるトマトが氣になつた。お主婦さんは麻絲なんかを引張つてトマトの枝をそれで支へてやる。それでトマトはどん〳〵大きくなるのである。或る日私はたうとう我慢がしきれなくなつて、その枝を少し摘み始めた。そこへ食後の片付けを濟ましたお主婦さんがやつて來て、

「アラ。」

と大聲で言つたので、私ははつとして手を止めた。お主婦さんはそれから何か早口でベラ〳〵と喋舌り出したけれども、さうなつてはもう私には手がつかない。私のしたことが氣に入らなかつたことだけは明瞭であるが、こちら

貰はう。

向い（き）て

の心持を十分解つて貰ふことは、私の不十分なドイツ語ではとても出來ないことを知つてゐるので、夕方夫が歸つて來たら、言つて貰はうと思つて、私は唯默つてゐた。お主婦さんも默つて、やがてそこに落ち散つたトマトの葉を片づけにかゝつた。

夕食の時、私は先づその話をしはじめた。夫がお主婦さんに私のしたことの説明をしてくれた。やゝ不機嫌な顔をして聞いてゐたお主婦さんは、私の方を向いて、

「あなたが惡意でなさつたんではないことはよく判つてゐました。しかし私は一枚の葉さへ大切にして育てゝ來たんですから、さうしてあんなに立派に枝が出て花さへ咲

いてるんですから……その枝があんなに折りとられてゐるのを見て、私は悲しくなつたんですよ。」

「しかしあなたはトマトの實をあがりたいんでせう。」

夫はかういふ風に話をすゝめた。お主婦さんにいはせると、あれで去年も一昨年もトマトの實はなつた。さうして店で買ふやうに大きくはなかつたが、同じやうに美味かつたのである。それで、しばらく話がもつれたが、間もなく妥協が成立した。一本のトマトは私の自由にする。一本はお主婦さんの氣の濟むやうに育てる。

結果は言ふを要しない。私の育てた木になつた大きなトマトをはじめて取つた晩、それは私の名譽のために食卓

かういふ

妥協が成立した。

結果は言ふを要しない。

の上に一つの皿に盛られた。それを四つに切つて四人がたべたことは勿論であるが、それと一緒に同じやうに赤く熟した小さいお主婦さんのトマトもそこについてゐた。元來トマトを餘り好かない私は、一口にも足りないやうなそれを舌の上へ運びながら、まづさうな顏をしてはならないと思つた。私がそれにフォークを刺すとお主婦さんが先づ笑つた。私も笑つた。四人は今更に眼を見合はせてまた笑つた。私は勝誇つた氣はしなかつた。お主婦さんも口惜しいやうでもなかつた。

私は今日トマトの苗を植ゑながら、もう十年近くもなるベルリンのその日のことを思ひ出した。

（『週刊朝日』）

刺—刺

植ゑ

長塚節（たかし）
歌人
茨城縣の人
大正四年（一九一五）
歿
年三十七
鬼怒川
栃木縣日光山奥
鬼怒沼に源を發
し茨城縣で利根
川に合流する
沿うて
見え。
帚＝箒

七　小春の岡

長塚節

小春の日光は岡の畑いつぱいにさしてゐる。岡は、田と櫟林と鬼怒川の土手とで圍まれ、他の一方は村から村へ通ふ街道へ傾いてゐる。

田は岡に沿うて狹く連なつてゐる。田圃を越して、竹藪交りの村の林が田に沿うて延びてゐる。竹藪の間から草家がぽつ〳〵と見えかくれする。帚草を中途から伐り離したやうに枝をひろげた櫟の木が、そこにもこゝにもすくすくと突立つてゐる。

田にはもう掛稻は稀で、竹の「をだ」だけがまだ外されずに

鳴＝鴨
陰＝蔭
越え。
聳え。
筑波山
茨城縣の中部に
在る
海拔八七六米

立つてゐる。「をだ」には黄昏に鳴でも來てとまる位のことだらう。見るから淋しげである。

鬼怒川の土手には篠がいつぱいに繁つてゐるので、近くの水は其の陰に隱れて見えぬ。上る白帆は篠の尖に半分だけ見えて、しかも大きい。土手の篠を越えて水がしらじらと見えるあたりは、もう遙の上流である。だから、篠の尖を離れて高瀨舟の全形が見える頃は、白帆は遙かに小さく縮まつてゐる。土手の篠の上には、對岸の松林が連なつて見える。更に其の上には、筑波山が一脚を張り、他の一脚を上流まで延ばして聳えてゐる。小春の筑波山は、常磐木の部分を除いては赭く焦げたやうである。其の赭い頂上に、

觀測所　筑波山測候所測—側

筑　波　山

點を打つたやうに觀測所の建物がぽつちりと白く見える。やゝ不透明な空氣は、針の尖でつつくやうに其の白い一點を際立つて眼に映じさせる。

櫟林は、此の狹く連なつてゐる田と鬼怒川との間をつないで横につゞいてゐる。田も遙かさきは櫟林に隱れ、鬼怒川も上流はいつか櫟林に見えなくなる。櫟の木にびつしりと赭い葉がくツついてゐる。

兩毛　上野（群馬縣）・下野（栃木縣）

抵—柢、低、底

掘（堀）

芋—竿

岡の畑は向うへいくらか傾斜してゐるので、中央に立つて見ると、櫟林は半ば隱れて、低い土手のやうに連なつて見える。林の上には雪を戴いた兩毛の山々がぼんやりと白い。こんな周圍の中に、岡の畑は朗かに晴れてゐる。土は乾き切つてゐる。既に二三寸に延びた麥は、岡いつぱいに薄く綠靑を塗つたやうである。

そこにもこゝにも百姓が小さく動いてゐる。麥畑をうなつてゐるものもあるが、大抵は芋掘りの人々である。四五人の手で芋を掘つてゐる。畑の緣には馬が茶の木に繫いであつて、俵が轉がつてゐる。此の俵があれば、遠くからでも芋掘りの人々であることがわかる。

馬は退屈まぎれに、茶の木をむしることがある。其の時一人が驅けて來て、轡をがちんと一つ極めつけて叱りとばすと、またおとなしくなつて、ぱさり〳〵と尾を動かしてゐる。

みんなの手もとは忙しい。しかし、岡はたゞ長閑である。日は稍傾いた。忽然として筑波山の絶頂から眩しい光がきら〳〵とさして來た。毎日同一の時刻に、此の光は此の岡へ強くさしかけて來るのである。或者は筑波山で火を燃やすのだらうなどといつてゐる。しかしそれは觀測所のガラス窓が日光を反射するのである。岡の畑に變化が起つたとすれば、數時間にたゞこれだけである。ガラス窓

隣＝鄰
生え（生ひ）
茹＝茄

の反射はやがて消えてしまつた。芋掘りの人々は勿論此の光を知らなかつた。兩毛の山々のぼんやりした日は西風が吹かないので、隨つて暖い。暖い日は芋掘りには此の上もない日和である。

街道へおり口の畑でも二人して芋を掘つてゐる。隣の桑畑は葉が大方落ちて、あたりへもそれが散らばつてゐる。青いよわ〳〵した小麥が生え出してゐる。小麥は芋の間に二畦づつ作つてある。芋の莖はべつたりと茹でたやうである。女は芋の莖を菜刀でもとから切つて先へ出る。菜刀といふのは庖丁のことである。後から男が鍬の先で芋の株を掘り起す。ぴか〳〵と光る鍬の先を、ざくつと芋

塊―槐、魁、魂、醜、蒐

の株へ斜に突きたてて、ぐつと鍬を持ちあげると、大きな土の塊がふはりと浮きあがる。鍬をそつと拔いて先の株へ移る。小麥に障らぬやうに極めて丁寧に掘つては先へ先へと行く。女は莖を切り終ると、後へ戻つて、掘つてある大きな土の塊を兩手で二尺ばかりあげて、どさりと打ちつける。こまかな土がほぐれて、こゞつた子芋の塊から白い毛のやうな根がぞろつとあらはれる。それから芋と芋とを兩手でぶり〳〵とはがして、やがて俵を立てて入れる。さうして穴の土を手の先でならして、次の塊をほぐす。乾いた畑に濕つた圓い穴のあとが一つづつ殖えて行く。日光が其の土をあとからあとからとこまかに乾かして行く。

さうして

圓(円)殖え。

芋の株を掘り終つて、鍬についた土を草鞋の底でこき落して茶の木の株へ腰をおろした。鉢卷をとつて額を拭つてゐる。小春の暖かさは、ちく〳〵と痛いやうに痒いやうに毛穴から汗をにじみ出させる。村の若者が馬へ大根を積んで來た。若者はぱか〳〵と、四つ脚の拍子よく走せて行く馬の後から手綱を延ばしてついて行く。

短い日は、村の林の梢に棚引いた土手のやうな夕雲に、眞逆樣に落ちかゝる。横にさす光は麥の葉をかすつて赭い櫟の林が一しきり輝く。

畑のへりの茶の木の花は白々と光を帶びてゐる。筑波

山は見る〳〵濃い紫に染まつて來た。秋の末の晩稻を刈る頃から、夕日のさし加減で、筑波山は形容し難い美しい紫を染め出す。百姓に聞いてみれば、嘗てそんな筑波山は知らぬと言ふ。知らぬといふのは尤ものことである。日が落ちて殘曛がなほ明らかな數十分間は、彼等の仕事が最も捗どる時である。晩餐の支度をするために、女等は今どこの畑からも一人づつ立つて行く。

女等が去つてしまふと百姓の手もとが漸く薄暗くなる。頰白が淋しさうに桑の枝を飛びめぐる。百姓はそんな事には頓著なしに、せつせと芋を俵につめる。

末—未
刈(刈)

姓—性
嘗(嘗)
そんな筑波山は知らぬと言ふ。

捗—渉

村の竹藪から昇つた靑い煙は、畑の百姓を迎へにでも出たやうに幾筋も棚引いて、田圃から岡まで屆かうとしてゐる。其の時、百姓は黃昏の中を、相前後して歸つて來る。何處ともなく鳴がきゝと鳴いて去つた。百姓の後姿を村の中へ押込んで、やがて夜の手は、田圃から、畑から、次第に天地の間を掩うた。

《『長塚節全集』》

鬼怒川を夜ふけてわたす水棹の遠く聞えて秋
たけにけり
芋殼を壁に吊せば秋の日のかげり又さしこま
やかにさす

—長塚節—

藪—籔
筋—筋
屆(屆)から。

鳴—泣
百姓の後姿を村の中へ押込んで、やがて夜の手は、田圃から、畑から、次第に天地の間を掩うた。

石川啄木
明治の歌人
名は一
岩手縣の人
明治四十五年(三
至三)歿、年二十
七
背…青

八　ふるさと

石川啄木

たはむれに母を背負ひて
そのあまり輕きに泣きて
三歩あゆまず

石川啄木

いのちなき砂のかなしさよ
さら〳〵と
握れば指のあひだより落つ

遊に出て子供かへらず

關(関)

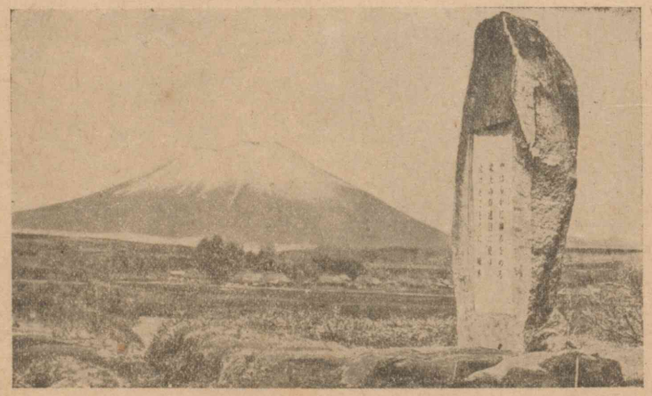
取出して
走らせてみる玩具(ガング)の機關車

有難きかな。

ふるさとの山に向ひて
いふことなし
ふるさとの山は有難き
かな

訛なつかし。

ふるさとの訛(ナマリ)なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聽きに行く



啄木の歌碑

なつかしき
故里にかへる思あり
久しぶりにて汽車に乘りしに
東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

汽—氣

泣きぬれて。

九　樂聖ベートーヴェン

牛山　充

秋になると樂しい音樂の季節が始ります。これは歐米諸國も日本も同じことで、空が高く澄み、月の光が冴えて來ると、自然に人の心が洗ひ清められて、高尚な音樂心が喚び起されるからでせうが、この季節になつて、そゞろに思ひ出されるのはベートーヴェンの傑作「月光の曲」と、この曲の由來について語り傳へられる若い靴屋の盲目な妹娘の美しい物語です。あなた方は已にこの名曲をも物語をもお知りになつてゐることでせう。ほんたうに佳い物語ですが、實話ではありません。しかしかういふ美談が生まれるには、

牛山　充
音樂評論家
長野縣の人
明治十七年生

ベートーヴェン
(1770—1827)
冴え。

已—已、已
ほんたう

それだけの理由があるのです。

ベートーゼンは子供の時から苦勞をした人で、氣の毒な人たちに對する同情心の非常に深い人でありました。彼がその收入の半ば以上をさいて困つてゐる人たちを救ひ、また幾度となく慈善音樂會などを開いて不幸な人々に盡くしたことは、あまねく人の知るところであります。

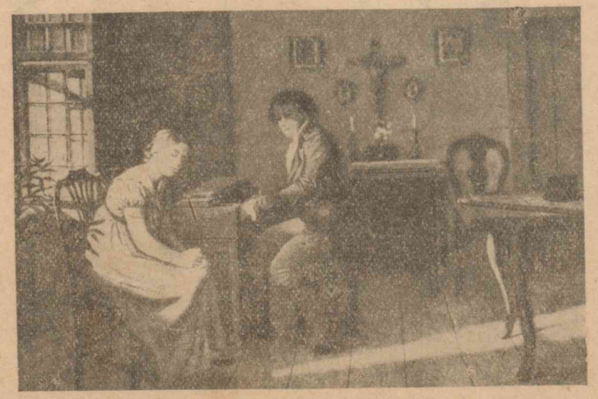
ベートーゼン

時代は英雄を生むといひますが、いかにもその通りで、十八世紀は各方面に多くの人傑を出しました。ナポレオン、

ナポレオン
(1769—1821)

エリントン、ゲーテ、ブレーク、モーツァルト、いづれもそれぞれの方面に於ける不世出の天才で、偉人中の偉人といはれる人達です。しかし、その悲壯な生活と偉大な藝術とにより、時代と國境とを超越して多くの人々を動かし、多くの人々に力と希望とを與へた點に於ては、何人もベートーゼンの右に出ることが出來ますまい。彼が空前絶後の樂聖として崇められ、世界屈指の大藝術家と仰がれるのは、決して偶

エリントン
(1769—1852)
イギリスの名將。
ゲーテ
(1749—1832)
ドイツの文學者。
ブレーク
(1757—1827)
イギリスの詩人。
モーツァルト
(1756—1791)
ドイツの音樂家。
不世出の天才。
時代と國境とを超越して。
點(点)
空前絶後の樂聖。
あぷく



ベートーゼンと少女

ボン　ドイツのライン河畔の都會。

選…撰

健氣にも。

助—肋

侯—候

然ではないのです。

ベートーゼンは七人兄弟の二番目に生まれました。そしてその下に五人の弟妹を有つてゐましたので、駄々ッ子の我儘な眞似などは、彼に取つて思ひもよらぬことでした。父はボンの選擧侯に仕へたテナーの唱歌手で、收入が僅かであり、しかもその大部分を酒のために浪費して、少しも家を顧みませんでした。病身の優しい母親はこれがために大勢の子供を抱へて苦勞を重ねましたが、これを見かねて、ベートーゼンは健氣にも十一の時から劇場に勤め、母を助けてよく弟妹の世話をしました。主君の侯は少年ベートーゼンの感心な心掛と秀でた樂才とを愛し、十四歳の時に

拔擢。

廷—庭

ギーン　オーストリアの首府、ダニューヴ河畔にある。

壇—擅、檀

雄心勃々として抑へ難く。

會(会)

與=与

拔擢して宮廷附の樂師に任じ、年額十五ポンドの俸給を與へて、その家計を助けられました。

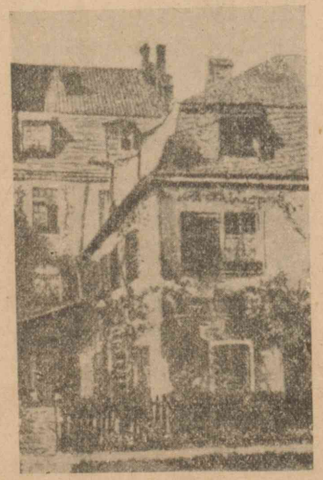
モーツァルト

當時歐洲に於ける音樂の中心はギーンで、その道の大家は多くこの都に集つて居りました。隨つて名を天下に知られるには、どうしてもこの都の中央樂壇に出なければなりません。十歳の年長なるモーツァルトの成功を聞くにつけ、ベートーゼンは、雄心勃々として抑へ難く、母の許を得て十七の時始めて都に出て、出世の機會を求めましたが、モーツァルトに面會して、與へられた課題に對す

る卽興演奏に非凡な才能を現して、將來の雄飛を豫言されたのはこの時のことです。

その中に故郷なる母親重病の悲報に接したので、孝心深いベートーゼンは大急ぎに歸郷して、わづかに母の死に目に會ふことが出來ました。母が亡くなつてから、父の酒癖はます〳〵惡化して來ました。やがて、宮廷では給料を父に渡さずして、ベートーゼンに支給することになつたので、ベートーゼンは子供ながらも家長代りとなつて弟妹の扶養を一身に引受け、收入の不足をばピアノを教へて補充しつゝ貧しい生計を立てましたが、その樂才はやがて上下の認めるところとなつて、多くの立派な後援者を得ました。

かうして五年間苦鬪をつゞけるうちに、弟妹も大きくなりましたので、二十二歳の時意を決してまたボーンに出ました。選擧侯もこの思立を贊成して若干の金子を惠まれたので、程なく二人の弟を呼び寄せてその面倒をみながら研究をつゞけ、一七九五年、二十五歳の年には、ピアニストとしても作曲家としても、立派に世に認められるやうになりました。


ベートーゼンの生家

それまでベートーゼンは箇人の客間で演奏してゐただけでしたが、この年慈善音樂會に出演したのが彼の音樂家

贊(贊)—干—于

派—脈

生活の第一歩であつたのです。それから間もなくギーン樂界の寵兒となりましたが、成功の絶頂に立つた時に於ても、絶えず貧しい人々のために盡くすことを忘れませんでした。彼は一八〇一年、故郷の舊友エーゲラーに寄せた手紙に、かう書いてをります。

「……こゝに困つてゐる友人があるとする。そして直ぐにこの友人を助け得る金の持合せがない場合にも、ちよつと机に向ひさへすれば、瞬く間にその困窮を救つてやることが出來るといふことは何といふ喜でせう。……私の藝術は貧しい人々を救ふこと以外の目的に獻げられてゐるものではありません。」

絶え。

エーゲラー（1765—1804）醫師。ベートーゼン傳記編纂者の一人。

をります。

獻（献）

一八一二年にグラーツで慈善音樂會が開かれた時、主催者は、ベートーゼンの人となりを知つてゐて、助力を求めました。彼は生憎手許に金がなかつたので、早速自作の「橄欖山」及び「合唱幻想曲」の樂譜に、原稿のまゝの樂譜二三を添へて寄附し、これに對して先方の申し出た代價をどうしても受取らうとしませんでした。その後バーデンに大火があつた時には、罹災者の慘狀を見かね、率先してカルルスバードで慈善大音樂會を開きました。かういふ美擧は數へきれない程多くあります。

ベートーゼンは生涯獨身で過ぐしましたので、借家住居のことが多く、食事も大抵カフェーやレストランで取りま

グラーツ　オーストリア東南部にある都會。

幻—幼

對（対）

バーデン　ドイツの西南部の都會。

率先。

カルルスバード　温泉地。チェッコスロヴキヤのボヘミヤ州にある。

美酒佳肴。
かやう
勢家權門。
王侯貴族。
至純な人格に心服。
遺—遣

したが、決して美酒佳肴（カコウ）を口にせず、衣服も極めて質素（シツソ）で、餘分の金は悉く肉親や友人の窮乏（キユウボウ）を救ふために使ひました。

ベートーゼンはかやうに貧しい人には親切で、弟子にも優しくしましたけれども、勢家權門に阿ることは大嫌で、この點ではお世辭のよいゲーテと全く正反對でした。それでも王侯貴族が爭つてこの樂聖の意を迎へて逆らふまいとつとめたのは、無論その不世出の天才によるのですが、一つはその至純な人格に心服したからであります。

ベートーゼンはその天才を完成して多くの大曲を遺しました。貧しき者苦しむ者のために十二分の慈善を行ひました。またその藝術と人格とによつて一世の尊敬を一

つぴ—つい
致命的の痛手。

ベートーゼンの筆蹟（下）

最初の樂譜（右）

身に集めました。かう數へて來ると、彼は人生の幸福を極め盡くしたかのやうに思はれますが、これらの凡てを忘れるまでに彼の心を暗くしたのは、その健康上の損失です。彼は壯年の頃から聽覺喪失（ソウシツ）の徵候を見始めましたが、治療の方法を誤（アヤマ）つたため、遂に全く聽覺を失ひました。音を生命とする者にとつて、これは實に致命（チメイ）的の痛手です。殊にベートーゼンは、極めて親しい二三の人以外にはこの事を知られる

しよう。

不朽の大作。

言語道斷。

シルレル（1759—1805）ゲーテと並び稱せられた詩人。

音樂藝術の金字塔。

苛酷な運命。

惱—腦

のを恐れたため、その苦しみはまた特別で、これがために自殺しようとしたことも度々あつたと申します。しかしその度毎に、彼はまだ〳〵世のため人のために盡くし得る命を自ら絶つのは神意に背くと考へて、勇氣を振るひ起し、病苦と戰ひつゝ、次々に不朽の大作を完成したのです。その志の悲しさ、美しさ、尊さは、實に言語道斷といはねばなりません。彼がシルレルの「歡喜の頌」に作曲した合唱附の第九交響曲「莊嚴彌撒」は、古今を通じて音樂藝術の金字塔であるといはれる傑作ですが、この二曲を始め、作品中のおもなものは皆この耳の病苦に惱み、苛酷な運命と戰ひながら書き上げたもので、人間の精神の力がいかに偉大であるかを物

勝利の記念碑。

戲（戲）娛—誤

選を異にす。

心血を濺ぐ。

ツェルニー（1791—1857）オーストリアの人。ベートーゼンの高弟で、作曲家として有名である。

語る、最も光輝ある勝利の記念碑であります。

世にはたゞ耳を喜ばせるに過ぎない娛樂的の音樂が多いものです。音の戲れ以上に出ないものが、誤つて名曲と考へられることも度々あります。ベートーゼンはこれらとはすつかりその選を異にして、常に精神の音樂を書きました。この樂聖の心血を濺いだ傑作が聽く人の心を搖り動かし、名狀することの出來ない感動を與へるのは、一にこのためであります。

あなた方の中にはピアノを彈かれる方がありませう。もし稽古が進んでツェルニーの練習曲に入られた方があるならば、その人はベートーゼンの孫弟子になつたのです。

この曲の中にはツェルニーがベートーヴェンから習つたものがはひつてゐるからです。また既にこの練習曲を習ひ上げて樂聖自身の手になるピアノ曲を學んで居られる方があるならば、その方は或意味に於て、この樂聖から直接に教を受けて居られるのです。藝術家はその作品を通じてのみ最も正しく自己を語るので、我々とベートーヴェンとの關係には想像以上非常に親しいものがあります。

一〇月の旅

柳澤 健（ヤナギサワ ケン）

小鳥眠れる丘の木立を、
月はしづかにのぼりてきたる。

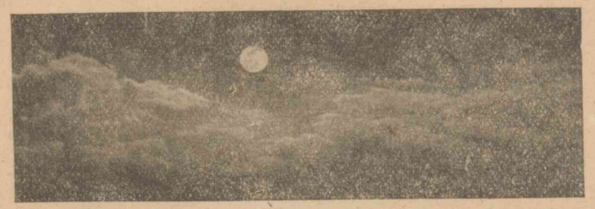
柳澤 健
詩人、外交官
福島縣の人
明治二十二年生

夢みてねむれる小鳥を見すてて。

ほゝゑみ

越え。

丘越え、谷越え、はてなき旅に。



月よ、月よ、木立をはなれて、
ひとり いづこへ さまよひいづる。
夢みてねむれる小鳥を見すてて、
ひとり いづこへ さまよひいづる。

月はこたへず さみしくほゝゑみ、
はるけき空へと さまよひいでぬ。
丘越え 谷越え はてなき旅に、
はてなき旅に 月はいそぐ。

薄田泣菫
詩人　隨筆家
名は淳介
岡山縣の人
明治十年生

張果老
玄宗（治世一三七三—一四一五）の頃の人。

一一　仙人と石

薄田泣菫

支那の唐代に、張果老といふ仙人がありました。恆州の中條山といふところに棲んでゐて、旅をする時には、いつも驢馬に跨つて一日に數萬里の道程を往つたといひます。旅に疲れて家に歸つて休まうとでもする場合には、驢馬の首や脚をポキ〳〵と折疊んで持ち運んださうです。途中に、思ひがけなく川に出水があつて徒渉りがしにくかつたりすると、この仙人は手にさげた折疊み式の馬に水を吹きかけます。すると、驢馬は急に元氣づいて、曲げられた四つの脚を蹈み伸ばして、もとの姿にかへつたさうです。

時折長い尻尾をふつては羽蟲を追つてゐました。

日の光はそこらいつぱいに流れて、廣い野原には自分たちの外に、何一つ生物の影が見えませんでした。

或時、張果老が長い旅にすつかり疲れ果てて、驢馬から下りて、野中の柳の蔭で休んでゐました。驢馬はその傍でうまさうに草の葉を食べ、時折長い尻尾をふつては羽蟲を追つてゐました。すると不意に、

張果老（下村觀山筆）

「おい、仙人どの、仙人どの。」

誰やら呼ぶ聲がしたので、張果老はうつら〳〵する眼を開いてあたりを見廻しました。

十月の靜かな暖かい日の光はそこらいつぱいに流れて、廣い野原には自分たちの外に、何一つ生物の影が見えませんでし

でした。張果老はまた睡りかけようとしました。すると、

「おい、仙人どの。仙人どのッてば。」

とまたしても自分を呼ぶらしい聲がするので、仙人は不機嫌さうに眼を覺ましました。

「誰だ？　わしを呼ぶのは？」

「わしだ。お前の前に立つてゐる石だよ。」

「なに、石だつて？」

仙人はずつと向うを見てゐた眼を急に自分の脚もとに落しました。そこには白い石が立つてゐました。仙人は氣むづかしさうに言ひました。

「お前か、さつきからわしを呼んでるのは？　わしは今

どこに口があるとも分らなかつたが、白い石はしつかりした聲で言ひました。

五萬里　約三萬三千キロ。（支那の一里は日本の六町に當る。一町は約百九メートル）

仙人は得意さうに驢馬を見返りました。馬は主人の顏を見て、にやりと笑ひました。

睡りかけてゐるところなんだ。」

「それはすまなかつた。お前に逢つたら、是非一度訊いてみたいと思ふことがあるもんだからな。」

どこに口があるとも分らなかつたが、白い石はしつかりした聲で言ひました。

「何か、お前が訊きたいといふのは？」

「外でもない。わしは隨分長くこゝに住んでゐて、よくお前が驢馬に乘つてそこいらを驅けて往くのを見るが、恐しい速さだね。」

「速い筈さ。一日に五萬里を往くのだからな。」

仙人は得意さうに驢馬を見返りました。馬は主人の顏

を見て、にやりと笑ひました。

「五萬里！　それは驚いた。」石はびつくりして、少し肩を動かしたやうでした。

「そしてそんなに速力の出る馬を、どこから手に入れることが出來たのだ？」

張果老は仙人らしい白いあご鬚を、細い樹の枝のやうな指でしごきました。

「どこからでもない。わしが自分の法力で拵へたのだ。わしはさういふ馬を、是非一頭ほしく思つたから。」

「なぜまたそんな途方もない馬がほしくなつたのだ？」

長年同じところにじつとしてゐる石には、仙人のそんな

昨日見た夢を思ひ出すやうな眼つきをした。

暴風のやうに驅けずり廻つた。

待ち切れないやうに口を出しました。

氣持が腑に落ちないらしかつた。

「わしは、幸福の棲む土地を尋ねて、方々搜し歩きたかつたからだ。」仙人は昨日見た夢を思ひ出すやうな眼つきをしました。「わしはあれに乘つて、毎日々々どこといふ當てもなく、暴風のやうに驅けずり廻つたよ。わしが尋ね殘した國は、どこにもないほどだ。この原つぱも今日まで幾度通つたか、覺えきれない。……」

「さうして、その幸福とやらはうまく見つかつたかね。」

白い石は待ち切れないやうに口を出しました。

「まだ見つからない。そしてわしはすつかり年を取つてしまつた。」仙人はかう言つて、自分の姿を今更のやうに見

返りました。「鬚はこの通りに白くなるし、手は痩せて枯木のやうに細くなつた。……」

「わしは昔からずつとこゝに立つてゐるが、別段それを不仕合せだとも、退屈だとも思つたことがない。わしがお前のやうに方々飛び廻りたく思はないのは、何故だらうな。」

石の言葉は他人に話すのではなく、獨語のやうでした。

仙人はそれを聞くと、深く頷きました。

「わしもこの頃になつて、やつとさう思ひ出したよ。幸福といふものは、外にあるものぢやない。こゝぞと思ふところに落ちついて棲んでゐれば、始めてそこに幸福といふものが……」

幸福といふものは、外にあるものぢやない。

人間といふものは、みんなこれまで自分のして來た仕事に引きずられて往くものだ。

「それはお前にしては出來過ぎた程の思ひつきだ。どうだい、いつそこゝに落ちついて、わしと一緒に棲んぢや。お前にしても、もう一生のつゞまりをつけてもいゝ年齢だよ。驢馬の始末なら、明日にでも通りがかりの旅商人に賣り拂へばいゝぢやないか。」

白い石が無遠慮にかう言ふと、驢馬は長い耳でそれを立ち聞きして、癪にさはつたらしく、いきなり後脚を上げてそこらを蹴散らしました。

「いや。わしにはそこまでの思ひきりがない。人間といふものは、みんなこれまで自分のして來た仕事に引きずられて往くものだ。—あゝ、お前につかまつて、つい長話をし

過ぎた。わしはもう出かけなければならない。……」

張果老は哀しさうに言つて、自分の膝の上に落ちた砂埃を拂ひながら立ち上りました。石は見えぬ眼で、それを感づいたらしく、

「やつぱり幸福を求めて？」

「さうだ。幸福を求めて！……こんなにして方々驅けずり廻つて、やがて死ぬのが、わしの一生かも知れない。とにかく、わしは出かけなければならない。」

仙人は靜かな足どりで、驢馬のゐる方へ歩み寄りました。馬はそれと氣づいて、元氣さうに高くいなゝきました。

「そんなら、もうお別れだ。」

暴風のやうに飛んで、またゝく中に、點のやうに小さくなる。

張果老はひらりと驢馬の背に跨がりました。そして一鞭あてたかと思ふと、馬は暴風のやうに飛んで、またゝく中に、廣野のはてに點のやうに小さくなりました。

「とう〳〵往つてしまつた。……わしはやつぱり一人ぼつちだ。」

白い石は低い聲で獨語を言つて、そのまゝ默つてしまひました。

秋の日はそろ〳〵西へ落ちかゝりました。途を間違へたらしいこがね蟲が、土をもち上げて、ひよつくりと頭を出しましたが、急にそれと氣づいたらしく、すぐにまた姿を隱してしまひました。

（『草木蟲魚』）

秋の入日が茜色に山を染める。

「愚」といふ德。

盈つる月、虧くる月に日並を知つた頃の話。

一二 元七黑七鳥

會津地方の或山里の話である。

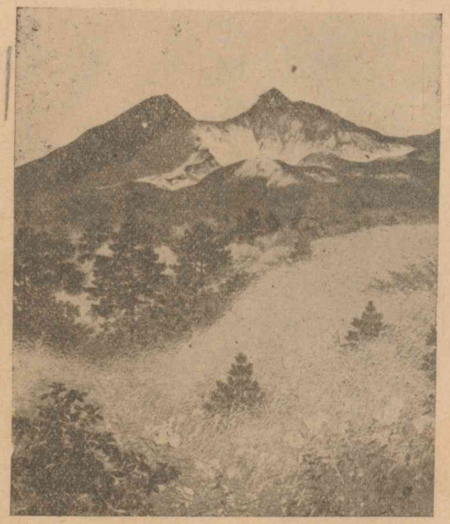
秋の入日が茜色に山を染める時分に、林の中では片羽が白く片羽の黑い翼を持つた鳥が、淋しい聲で鳴くといふ。土地の人々は、これを元七黑七鳥と呼んでゐるが、この不思議な翼と名前とを持つた鳥の由來について、哀れにもまた面白い物語がある。

それは遠い〳〵昔の傳說である。人々がまだ「愚」といふ德をもち、雞の聲に目をさまして、盈つる月、虧くる月に日並を知つた頃の話である。近い世の事ではない。

めつきりと衰へて、頰に勇猛の血潮を見ぬやうになつた。

紛—粉
弦—絃

その頃、この山里に獵を渡世とする一人の男がゐて、その子に元七、黑七といふ兄弟があつた。二人の母は弟の黑七がまだ幼い時分に、この世を去つた。



會津の山里　（野口謙次郎筆）

元七、黑七の父はその後めつきりと衰へて、頰に勇猛の血潮を見ぬやうになつた。日頃手馴れた半弓も、今は空しく壁にかゝつて埃の積るに任せてある。無論氣紛れに、時折弦を鳴らして見ることはあるけれども、もう昔のやうな興に乘ること

酒に映る我が顏に老の影さへ見出だしては、徒らに寂しさを增すばかりである。

やう
よう

彼はあらゆる慰安と希望とをその二人の子にかけて、はかなき世の憂節にも深き興味を感ずるやうになつた。

寂しい晩年に一つの色彩を添へた。

がない。獨酌の盃を傾けることもあるが、酒に映る我が顏に老の影さへ見出だしては、徒らに寂しさを增すばかりである。

妻には先立たれ、獵には興を失ひ、酒にさへ寂し味を感ずるやうになつては、何を樂しみにこの世に生存へよう。彼は惘然として力なくその日〳〵を暮した。

しかし、それは暫くの間であつた。やがて、彼の眼には二人の子供の成長して行く姿が見え出した。そして彼はあらゆる慰安と希望とをその二人の子にかけて、はかなき世の憂節にも深き興味を感ずるやうになつた。げに寂しいこの父の晩年に一つの色彩を添へたのは、その子供であつ

一しきり彼を襲うた寂しさは、我が子の愛によつて拭ひ去られた。

燃え。

父は遂に二人にはぐれた。

た。一にも子、二にも子、天にも子、地にも子、彼はもうその他を知らないやうになつた。

かくして一しきり彼を襲うた寂しさは、我が子の愛によつて拭ひ去られた。磐梯おろしの吹き荒む寒い夜でも、三人が樂しく食事する爐のほとりには、紅の榾火が陽氣に燃えて、美しく暖かであつた。

かくて幾年かを過ぎて、或年の秋である。時は獵の季節に入つて、弦音が日毎にあちこちの山に響いた。年こそ若けれ、獵人の血を受けた二人が、どうして家にじつとして居られよう。彼等は父を促して打ちつれて山に入つた。二人は輿に乘つて奥へ〳〵とはひつて行く。父は遂に二人

聲を限りに呼びくらしたけれども答がない。

淋しき夕日の影をあびて、ぼんやりと歸つて來た。

しんとした靜けさは父の胸に絶望の暗示を與へた。

答を豫期しなかつた呼び聲は、無論空しく靜かな空氣を驚かしただけである。

穩―隱

にはぐれた。聲を限りに谷々峰々を呼びくらしたけれども答がない。

子にはぐれた父は、淋しき夕日の影をあびて、ぼんやりと我が家に歸つて來た。見れば、我より先に人の歸つた樣子がない。しんとした靜けさは忽ち父の胸に絶望の暗示を與へた。

彼は鼓動する心臟を抑へつゝ、コトリとも音のしない室に向つて慌しく子の名を呼んだ。答を豫期しなかつた呼び聲は、無論空しく靜かな空氣を驚かしただけである。

父の胸は益〻穩かでなくなつた。彼は上り框に腰をかけて黑い足袋を片足脫ぎかけたが、ちよつとためらつて、直ぐ

身も世もなく叫びに叫んだ。

血に叫ぶ男叫びは、深山の寂寞を破つて終夜響いたであらう。

たぶれ

に山の方に引返した。そして廣い山の中を當てもなく歩きながら、我が子の名を呼んだ。

「元七！　黑七！　元七黑七！　元七黑七！」

彼は身も世もなく叫びに叫んだ。そして身にふりかゝる危險をさへ忘れて、斷崖、荊棘の嫌なく、どこまでも深入りした。

「元七！　黑七！　元七黑七！」

血に叫ぶ男叫びは、深山の寂寞を破つて終夜響いたであらう。

その翌朝であつた。始めて降りた霜は、樺の木の下に、片足に黑い足袋をはいて倒れてゐる老人の死骸を、白く悲し

く染めてゐた。そして傍の木の枝には、片羽が黑く片羽の白い翼を持つた小鳥が、パタ〳〵とさびしく羽搏きしながら、痛ましい血の聲に、

「元七！　黑七！」

と啼きつゞけに啼いてゐた。

失踪した我が子の行方を搜す熱心なる親心、身を殺してまでも子の行方を尋ねる強き愛着、烈しき煩惱が、一念小鳥と化して、長へに歸らぬ子の名を呼ぶのである。

かくして哀しき傳說に生きる元七黑七鳥は、とこしなへにその哀韻を啼きつゞけることであらう。

（『趣味の傳說』）

熱心なる親心、強き愛着、烈しき煩惱が、一念小鳥と化して、長へに歸らぬ子の名を呼ぶのである。

茹—茄

鹽（塩）

一三　茹　栗

私の友人の奧さんの家庭にあつたといふ實際の話である。

或時その奧さんの家で、茹栗の御馳走があつた。有合はせのを茹でたので、餘り澤山もなかつたのであらう、奧さんが茹でながら一つ二つと鹽梅見をしてゐると、茹であがる時分には大分數が減つてゐた。その家には、主人の外に四人の子供がゐた。奧さん自身を入れて六人になるのであるが、六人に分けるには餘りに數が少かつた。そこで奧さんは、お鹽梅見が少し過ぎたなとは思つたものの、自分は既

犧牲獻身。

に食べてゐるからとも言ひかねたのであらう、こゝが犧牲獻身の母の氣前の見せどころと、輕く考へて、

「お母さんは食べたくありませんから、お前たちだけであがりなさい。」

と言つて、六つ七つづつ、主人と子供との五人に分けてやつた。主人は豫て公平を主義としてゐる人であつた。細君のこの犧牲的の行爲を默つて見てはゐられなかつたのであらう、直ぐに子供たちに向つて、

「お母さんは、自分が食べないでお前たちにやると言ふけれども、お母さんに食べさせずに我々ばかり食べてゐては、少しもおいしくありません。お父さんも出すから、お前たちも一つづつお母さんにお上げなさい。」

おいしく

と言ふと、一番小さい子が、

「あたい否だ！」

と言つて直ぐに袖で自分の栗を隱した。その次に、一番大きい子が、良くも惡くもない中位なのを出した。その次に二番目の女の子が、一番旨さうなのを選つて、

「はい、上げます。」

と、靜かにお母さんの前に置いた。最後の三番目の子が、

「さあ！」

と言ふなり、ぽうんと蟲の喰つた奴を投げ出した。

「茹栗一つで四人の根性がすつかり解りますからね。わたしこれを見て、ほんたうに怖しくなりましたよ。」

といふのが、その奥さんの懺悔話であつた。

ひそかに物しながら、それを一かどの功名に轉化せしめようとする心。家内中同様に樂しまうとする公平な心。美味を獨占にしようとする利己の心。不承々々に出すお交際式の心。やるのもいま〳〵しいといふ捨てばちの心。一粒の茹栗が淨玻璃の鏡となつて、六人六樣の心をうつしてゐるから面白い。

（『雲來去』）

茹栗一つで四人の根性がすつかり解りますからね。

懺（懺）

淨玻璃の鏡。

葛原菡（しげる）　詩人、教育家。明治十九年廣島縣に生れた。

一四　たき火

一　たき火

葛原菡

はいて集めた落葉のお山、
もえるよ、もえるよ、
日くれ方。

もえる火の手で、垣根にうつる。
あのかげ、そのかげ、
誰のかげ。

一つ殘つてる梢の木の葉、
あがる煙に
ゆれてゐる。

少しつめたいみんなの背中、
たき火かこんだ
あかい頰。

二　寒雀

川路柳虹

雪のふる日に
でんせんに、
かるくとまつた

川路柳虹
詩人、美術評論家。名は誠。明治二十一年東京市に生れた。

鳴—鳴

寒雀。

ふつくら外套
身につけて、
はりがねのうへ
ちよんと鳴く。

粉雪、玉雪、
ぼたん雪。
なにがたのしい
寒雀。

彼等には嘘としか思はれまい。

二尺 一尺は約三十センチ。

一五　冬の雪國

同じく我が國土の中ながら、琉球臺灣に住む人々は雪といふものを知らぬ。まして雪國の冬の有樣など、彼等には嘘としか思はれまい。

寒國では霜が降り出すと、もうそろ〳〵冬籠の支度に取りかゝる。庭木や果樹は丈夫な丸太を支へとして、小枝をば繩で吊して雪折を防ぎ、小さい木は板や蓆で圍つて、凍らぬやうにする。家の外側は、鴨居から二尺ほどあけて、その下は悉く板で圍ふ。障子の合はせ目には、紙を貼りつけて、吹雪を防ぐ用意をする。謂はゆる目貼で、雪圍と目貼とが

積つては消え消えては積る。

消え。

雪催ひのひどく寒い晩。

濟めば、冬籠の支度はまづ整つたといつてよい。

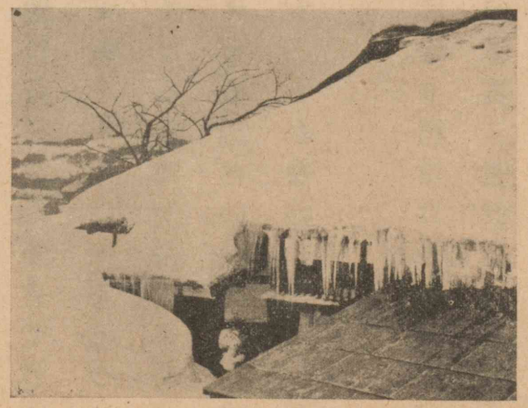
遠山の頂に見えた雪が、次第に麓の方へ進んで來て、里に降り始めるのは、凡そ十一月の初であるが、それから積つては消え、消えては積る中に、冬至頃になると、地上の雪が、しつかり固まつて消えなくなる。これを「根雪」といつて、これから翌春の三月頃までは、地面を見ることがない。雪國の冬の生活は根雪から始る。

根雪となれば、あとはたゞ降るばかり、積るばかり、寒い盛りには一日に五六尺も積ることがある。雪催ひのひどく寒い晩は、よく爐に焚火して更けるまで語り合ふ。外は森として何の音もない。空は眞暗で一物も見えぬ。話の進

おしつけるやうに寒くなる。

むにつれて、おしつけるやうに寒くなる。

かういふ夜が最も多く積る時で、翌る朝目を覺ますと、耳が切られる樣に冷たい。息が凍つて夜着の襟が白くなつてゐる。起き出でて臺所へ行けば、屋根裏の煤や蜘蛛の網が、銀モールのやうに眞白に凍つてゐる。これを「しらぶが張る」といふ。髭にも氷柱が下る。銅盥を取れば、手について離れぬ。鍋を取れば、鉉が指に凍りつき、煙草を吸へば、煙管の吸口が唇に凍りつく。



冬の雪國

華氏の水銀が最下の一點に縮み込んで、ぽつちりとも上つて居らぬ。

二間　一間は約百八十二センチ。

無理にはがせば、皮がむける。窓を開けば、積雪腰を沒するばかり。えらい寒さだ。寒暖計は？と見れば、華氏の水銀が最下の一點に縮み込んで、ぽつちりとも上つて居らぬ。

積つた雪は踏み固め、或は拂ひのける。雪を踏むには「深沓」といふものがある。膝にかゝるほどの藁製で、一尺前後の雪にはこれで間に合ふが、二尺餘にもなればカンジキをかけねばならぬ。なほ深く積れば、その上に米俵をはき、下固めしてその上を再び固め直す。道が高くなつてらかは、雪搔を以て道の兩側に搔き上げる。搔き上げるに隨ひ次第に高くなつて、遂には銀の高い堤が出來上る。その堤が時としては二間以上になることもある。道幅の狹い、雪の

穴居生活。

一吹き吹きすさめば、屋根の雪と地面の雪とが平らに閉ぢ合はされてしまふ。

人と雪との戰。

拂へぬ所では、いつまでも踏み固めるので、道路が家の軒よりも高くなる。往來へ出るには、戸口から穴を掘り、段階をつけて雪の梯子を上らねばならぬ。まるで一種の穴居生活である。

屋根の上にも雪が積る。三四尺になると下さねばならぬ。謂はゆる「雪下し」で、年に三四回は普通である。下す毎に軒端の雪が益〻高くなり、時には軒よりも高くなる。かやうな場合に最も人を困らすのは吹雪で、一吹き吹きすさめば、屋根の雪と地面の雪とが平らに閉ぢ合はされてしまふ。家の内は闇になる。慌てて切り開けばやがてまた閉ぢ合はす。全く人と雪との戰で、雪のやり場のない所では、雪塊

言葉通り寐耳に水の大騒。

細き太き短き長き無數の氷柱が軒から下つた狀は、研ぎすました劍を倒まに吊したやう、筍が倒まに生えたやうで。

を橇に積んで遠方の川に棄てねばならぬ。

雪中生活で最も怖しいのは、ザヰといつて雪の上を走る洪水である。幅の狹い河流は、嚴冬の眞中になると、やゝもすれば氷結する。氷結した上に上流の水が堰かれ〳〵て、遂には積雪の上を走つて、高窓から瀧の如く室内に注ぎ込む。寒中の、しかも窓の上から落下する洪水である。言葉通り、寐耳に水の大騒で、町中總出して川筋の氷を切り開くあわたゞしさは、言葉にも筆にも盡くされぬ。

美しいのは氷柱である。方言に金氷ともいふ。細き太き短き長き無數の氷柱が軒から下つた狀は、研ぎすました劍を倒まに吊したやう、筍が倒まに生えたやうで、それが日

水晶の簾。

二三寸　一寸は約三センチ。

大厦高樓。

道路の雪が磨りみがかれて鏡のやうになる。

光を受けて照り耀く時は、水晶の簾かとも疑はれる。長さの四五尺、徑の二三寸は不斷に見るところで、大厦高樓から垂れ下つた氷柱には、徑二三尺、それが大地までつゞいて、地面から生え拔いた巨柱のやうに見えるのも少くない。

子供の遊には、雪達磨、雪女房、御堂作り、坂作り、隧道作り、雪合戰など、皆取り〴〵に趣味はあるが、わけて樂しげなのは雪滑りである。根雪になると、車馬が廢つて橇の世の中になる。橇は雪中唯一の運搬器で、家として備へぬはない。晴天がつゞいて橇が頻りに通ると、道路の雪が磨りみがかれて鏡のやうになる。あぶないこと甚だしい。油斷をすれば直ぐに轉ぶ。老人や用心深い人は、下駄足駄のうらに

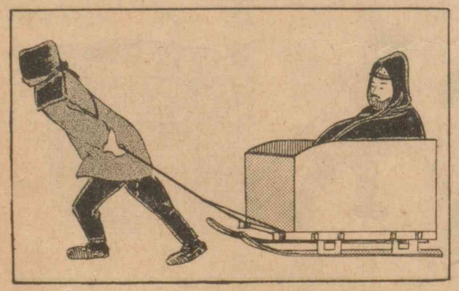
物の數でもない。

一二町　一町は約百九メートル。

心ゆく遊。

釘を打ち、藁靴に鐵カンジキをつけて、おづ〴〵とねらひ歩くが、待ちかねるのは子供で、彼等は遲しと竹ボホラといふ滑下駄をはいて、バン〳〵ツウと勢よく滑り出す。橇あとの光る所をギガといふ。二三間のギガは物の數でもない。賑かな往來には數十間疵なしの鏡を展べた所もあり、巧みな子供は「先よけ〳〵」と呼ばはりながら、一二町は物の見事に一息に滑りぬく。馴れぬ者の側目には冷汗するほど危なく見えるが、馴れた者にはこれほど心ゆく遊はない。

寒が明いて春雨が降り出すと、積つた



橇

雪の嵩が減つて、どッしりと締つて來る。この締つた雪の、夜半に凍つたのを「堅雪」といつて、これがまた暖國人には思ひもよらぬものである。今までは綿の如く柔らかで、脛を沒し身を沒した雪が、堅雪になると、靴でも下駄でもぬからなくなる。田畑も野山も石のやうに堅くなる。かうなると學校に通ふ子供は、田でも畑でも見通しに一直線の近路を行く。潤歩して、野山に魚かり、兎狩に出かける。

「かん〳〵堅雪、甘いか辛いか嘗めて見ろ。」

雪裝束

といふのが、彼等の堅雪を踏みながら唱へる文句である。

堅雪時の魚の捕り方がまた面白い。小川ならば魚のゐさうな所へ行つて、上流を堰きとめる。次に目ざした場所へ雪塊を山の如く投げ込むと、水は忽ち干てしまふ。そのあとで泥を掻きわけて鯉、鮒、鰌、鯰、逃がす氣遣なく思ふまゝに生捕られる。池や、堀や、湖水ならば、厚氷を渡つて、目星をつけた所に行き、鍬や鋸で氷を割つて一二尺の口をあけ、板を以て頻りに水をかい出せば、大魚小魚潑剌として氷盤の上に躍り上る。塙保己一は燈火が消えた時に目明きの不自由を憫んだといふが、雪國の者の目には、暖國の方が却つて不自由に見えるかも知れぬ。

大魚小魚潑剌として氷盤の上に躍り上る。

塙保己一　德川時代の盲目の國學者。文政四年(一八二一)歿、年七十六。

所かはれば品もかはる。

雪國には、雪の降るにつけて、また特別の職業がある。勞働者の職業は雪おろし、雪掘り、雪運び等で、彼等は雪が降らねば仕事がないところから、稼ぎ道具の雪搔に燈明を供へて、「白雪大明神、降らせ給へ、降らせ給へ。」と祈る。

所かはれば品もかはるが、どこの隅でも、天の惠の到らぬところはない。

國木田獨歩
明治の小說家
名は哲夫
千葉縣の人
明治四十一年(三五八)歿年三十八

やう〳〵
姉＝姉
肥え。

祖父樣のお手には荷が少々勝ちすぎるやうに相成候。

一六 初孫

國木田獨歩

この度は貞夫に結構なる御品御贈り被下難有存候。お約束の寫眞やう〳〵昨日出來上り候間、二枚差上げ申候。

國木田獨歩

内一枚は上田の姉に御屆け被下度候。御覽の如く益肥え太りて、最早祖父樣のお手には荷が少々勝ちすぎるやうに相成候。されば、この頃は只お膝の上に這上りて、だだをこね居候。この分にては、小生が子供の時に聞き候と同じ昔噺を、貞坊が聞き候ことも遠かるま

じと思はれ候。　これを思へば、悲しいとも、嬉しいとも、申し様なき感有之、まことに悲喜兩方に御座候。　父上は何を申すも七十歳、いかに強壯にましますとも、百年の御壽命は望み難く、去年までは父上父上と申上候を、貞夫出來候うて後、我等夫妻が何時となく祖父様とお呼び申すやう相成候以來、父上御自身も急に祖父様らしく成られ候うて、初孫あやし、ほく〳〵喜び給ふを見ては、寧ろ涙に御座候。　併し涙は不吉々々。御覽候へ、我等一家のいかばかり樂しく暮らし居候かを。　父上母上及び我等夫妻と貞夫との五人、春霞たなびく野邊と雖も、わが家ののどけさには及ぶまじく候。

こゝに父上の祖父様らしく成られ候に引換へて、母上は

候うて

成られ

御覽候へ……候かを。

益、元氣よろしく、殊に近頃は「ワッペウさん」といふ渾名まで取られ候うて、折々「おしやべり」と衝突なされ候こと、これ亦貞夫よりの事と思へば、可笑しく候。　おしやべりと申せば、皆様すぐと小生の事に思し召され候はば大違に候。　妻のことに候。　あの言葉少なき女が、貞夫出來候うて以來、急に口數多く相成り、近來は益、烈しく候。　然もそのお饒舌の相手が貞夫といふに至つては、實に滑稽に御座候。　先夜も次の間にて貞夫を相手に何か解らぬ事を申し居候間、小生、左様な事を言ふとも子供には解らぬ、少し默つて居ておくれと申候處、

「そら御覽、坊やがやかましいことをお言ひだから、父様の

取られ

候はば―候へば

御用のお邪魔になるとさ。」

「坊やがやかましいのではない。母親が饒舌るのだよ。」

「おやおや、今度は母様が叱られましたよ。ね、坊や、父様がやかましいつて。畏いことねえ。だから默つてねんねおし。」「困るね。そんな事を言つても坊やには解らないのだから、自分さへ默ればいいんだよ。」

「貞坊や、坊やはお話が解らないとさ。解りますつてお言ひ。坊や解りますよ、つて。」

右の始末に候間、小生も遂におしやべりの渾名を與へてもはや妻の勝手に任せ居候。

お饒舌はともかくも、子供のためにあの仲のよい姑と嫁

決(決)

天保 仁孝天皇の御代の年號。(一八三〇—一八四四)

明治 明治天皇の御代の年號。(一八六八—一九一二)

……こそ……

候なれ

例—倒、側

とがどうして衝突をと驚かれ候はんかなれど、決して御心配には及ばず候。これには奇々妙々の理由のある事にて、天保十四年生の母上の方が、明治十二年生の妻よりも、育兒の上に於て寧ろ開化主義たり急進黨たる事こそその原因に候なれ。妻は御存じの田舍者にて、當今の女學校に入學せしことなければ、育兒學など申す教育を受けしにもあらず、言はば昔風の家に育ちし平凡の女が、始めて子を持ちしまでゆゑ、無論小兒を育つる上に不行屆のこと多きに引換へ、母上は例の何事も後へは退かぬ御氣性なるが上に、孫可愛さの餘り、平生はさまで信仰し給はぬ今の醫師及び産婆の注意の一から十まで眞正直に受け給うて、それはそれは、

寢るから、起きるから、乳を飲ます時間から、何やかと用意周到のほど驚くばかりに候。更に驚くべきは、小生が妻のためにとて求め來りし育兒に關する書籍などを、妻は未だろくろく見もせぬ内に、母上は老眼に眼鏡かけながら、暇さへあれば片端より讀まれ候うて、成程成程と感心なされ候ことに候。右樣の事情より、自然未熟なる妻の不注意を甚だ氣にし給ふといふ次第、然るに、妻は又、

「お母樣、それは『母の務』の何枚目に書いてありました。」などと雜ぜかへしを申候ことより、愈母上は躍起となり給うて、「あなたは、から舊弊だから困る。」

と答へられ候。

到—倒

熟—塾

から舊(旧)弊

「世は逆樣になりかけた。」

と祖父樣大笑なされ候も、無理ならぬ事に御座候。

先日、貞夫少々風邪の氣ありし時、母上眼を丸くし、

「小兒が六歳までの間に死にます數は實に夥しいもので、ワッペウ氏の表には平均百人の中十五人三分と記して御座ります。」

と講義錄の口調そっくりで申され候間、小生も思はず噴きだし候。天保生の女の口から、ワッペウなどいふ外國人の名前を、一種奇妙な發音にて聞かされ候ことゆゑ、その可笑しさ又格別なりしが、遂にワッペウさんの尊號を母上に奉ることと相成候。祖父樣の貞夫をあやし給ふ時にも、

世は逆樣になりかけた。

噴—墳、憤

自らワッペウ氏を以て任じ居られ候。

岩崎三井にも少々融通してやるやう相成るべきかと内々樂しみに致し居候。

致―到

「ワッペウ、ワッペウ、鳩ぽっぽう」

と調子を取られ候位、母上も亦敢へて自らワッペウ氏を以て任じ居られ候。天保出來の女ワッペウと、明治生の舊弊人との育兒的衝突と來ては、實に珍無類の滑稽にて、一家常に笑聲多く、笑ふ門には福來るの諺にて行けば、追々と百千萬兩何のその、岩崎三井にも少々融通してやるやう相成るべきかと内々樂しみに致し居候。

併し、今は腰辨官吏の身の上、一つの乳母車さへ考へものといふ始末なれど、祖父樣には貞夫最早重く、抱かれかね候へば、乳母車に乘せて其處等を押廻はしたきお望に候間、近近大奮發を以て一つ新調を致す筈に候。

一輛の乳母車で、小兒も喜び、老人も亦小兒の如く喜び給ふかと思へば、福は既にわが家の門内に巣くひ居候。この上過分の福はいらぬ事に候。

今夜は雨降りて眞に靜かなる晩に候。祖父樣と貞夫とは既に夢もなげに眠り、母上と妻とは次の室にて何事か小聲に語り合ひ、折々忍びやかに笑ふさま、小兒のことの外、別に心配もなささうに候。

（『獨歩全集』）

西條八十
詩人　早稲田大學教授
東京の人
明治二十五年生

一七　母を頌ふ

西條八十

文字の中にて
いともなつかしき文字、
そは「母」。

いくたび紙にしるせども
おもひはつねに新たなり。

顔の中にて
いともなつかしき顔、
そは「母」。

日に三たび見て、日に三たび、
をどる（をどる）心のあやしさよ。

心の中にて
いとも眞（まこと）なるもの、
そは「母」。

いかなる重き罪人か
母のまことに泣かざらん（む）。

この世にて

はじめて我を見たるひと、
そは「母」。

その日の清きおもかげに、
曇あらすな、母のため。

一八　婦人團體の母

小野賢一郎

小野賢一郎
放送局文藝部長
燕子と號す
福岡縣の人
明治二十一年生

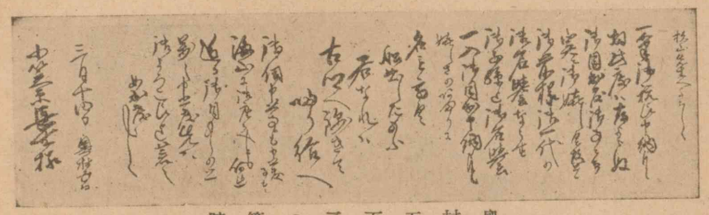
「母」とは奥村五百子の謂ひである。

五百子は肥前唐津高德寺の住職了寛の娘と生まれた。明治維新の亂れには、勤王のために男裝して父の使を果したこともあつた。夫と緣うすく、第一の夫とは死別し、第二

荒膽をとりひしいだ。

白刃の下をくゞる。

孝子節婦。



奥村五百子の筆蹟

の夫と生別してからは、專ら國事に盡力した。

五百子の負けじ魂はしば〳〵男の荒膽をとりひしいだ。名士に會はうとして、もし先方が避ける時は、握飯を携へて幾日も玄關に詰め切る位の事を、平氣でやつた。白刃の下をくゞつたことすらも屢あつたが、その一面には極めて涙もろい處があつた。そしてその涙は君のために泣き、國のために泣く涙であつた。軍人のために、軍人の遺族のために、孝子節婦のために、泣く涙であつた。かういふ五百子には又針を持ち、庖刀を持ち、三味線

明治三十一年（一三九八）

光州　全羅南道光州郡にある町。市街の西南にある公園内の光州神社境内に奥村五百子の銅像がある。

京城　朝鮮の主都。

事苟くも國家に關して來ると。　劍＝劍

を彈き、舞を舞ふ優しい半面もあつた。

明治三十一年の春、五百子は朝鮮に渡つて、光州に實業學校を創立した。同時に、そこに日本村を建設しようとして、養蠶の教師や、大工、左官、洗濯屋までを移住させて、朝鮮の開拓に從事した。その時分のことである、京城の日本公使館へ行つて、玄關をはひるや否や、「何といふざまです。月給はうんと取りながら、破れた國旗を掲げて居るとは。早く國旗をお取替なさい。」と叱咤したのは。そしてぼろ〳〵になつてゐた日の丸が、間もなく新しい旗になつたのは。

萬事がこの調子で、事苟くも國家に關して來ると、五百子は誰れ彼れの差別なく眞劍に眞向にぶつかつた。「雷婆さ

彌（弥）

亙（一亘）

つくしし

ん」の異名はやがて全國に轟きわたつた。「御國のために死ぬれば阿彌陀樣が引取つて下さる。」と口癖のやうに言つて、何物をも恐れなかつた。光州の實業學校は度々暴徒に襲はれたが、少しもひるまなかつた。

翌年七月、五百子は東伏見宮妃周子殿下に拜謁を仰せ付けられた。女性の身を以て、國家のために、海外で産業を興し、宗教をひろめてゐる健氣な心掛をめでさせられたのである。その時五百子は、前後三時間に亙り誠心をこめて朝鮮の事情を言上した。そして、

ますらをも及ばざりけり國のため
こころつくしし君がまことは

天津　河北省。北支那の商業都市。
鄭はま子　領事鄭永昌の夫人。
砲煙彈雨。

といふ御親筆の色紙を拜受し「死んでも心のこりはありません。」と言つて感激した。

明治三十三年、五百子は北清事變の慰問使として東本願寺から支那へ派遣された一行に加つて天津へ赴いた。宿は日本領事館であつたが、一夜領事夫人鄭はま子から團匪襲擊當時の話を聞いて、五百子の心に始めて一穗の灯が點つた。話の大要は、かうであつた。

領事館の婦人達は義和團匪に包圍されると同時に、日本婦人らしく短刀を肌身離さず持つてゐて、萬一に備へた。砲煙彈雨の中をくゞつて、炊事や負傷者の手當に狂奔したはま子は、大砲の音を聞きながら產婦のとりあげをもした。

爆—瀑、曝
裂—烈
北京（ペキン）　明、清兩朝約五百年間の首都であつた。

領事館が爆破された時、はま子は兩陛下の御眞影を移すために二階へ上つたが、漸く奉安した刹那に、大地の裂けるやうな音がした。「その時は、もう死んだな！と思ひましたが、目をあけると、人の顏が見えるではありませんか。」と聞かされると、五百子は泣き出した。

天津や北京で、日本の兵士が、豚の死骸が浮いてゐる濁流の水で、炊事をしたり洗濯をしたりしてゐるのを見て、「軍人は國家のためとはいへ、實に一方ならぬ苦勞をしてゐる。せめて、戰死者の遺族や出征者の留守宅の人達を慰めてでもあげなければ、天子樣や如來樣にすまない。」かう考へると、一たび點された五百子の心の灯はだん〳〵とその光を

五百子の心に點された聖火が種となつて燃えさかつた結果である。

燃え。

増して來た。百數十萬人の女性が團結してゐる今日の愛國婦人會は、實にこの旅行中に五百子の心に點された聖火が種となつて燃えさかつた結果である。

奥村五百子銅像
（愛國婦人會本部）

その後である、五百子が半襟一掛演説の行脚を始めたのは。

「半襟一掛を節約して下さい。その結果が戰死者の遺族や出征者の留守宅の人々を慰めて上げる大きな働をするのです。」東京の集會の席上や街頭でまづ擧げられたその叫は、次第に全國にひろがつた。被布に袴、草鞋穿き

津々浦々。

嚴—厳

徹底的に論議する。

當(皆)

の五百子は津々浦々にその姿を現した。どこへ行くにも、宿料は一泊五十錢、汽車は三等と定め、會の金と自分の金とを嚴重に區別して、何事にも公私を混同することがなかつた。若し五百子の主張に對して心なき批評や嘲笑を加へたりする者があれば、徹底的に論議して讓らなかつた。「雷婆さん」は全國到るところ、雷を鳴らしながら、その君國を思ふ誠意に人を泣かしめた。

石川縣の或所で講演をした時のことである。五百子の熱辯に動かされて、入會の申込をした者も相當にあつたが、人々の立ち去つたあとに、洗ひ晒しの木綿の筒袖を着た三十歳ばかりの婦人が唯一人殘つてゐた。そして五百子が

奥へ入らうとすると、「先生」と呼び止めて、「私は車夫の女房でございます。私のやうな卑しい者でも、その會へ入れて戴けませうか。私は軍人さんがそれほどまでお國のために難儀してゐられるとは知りませんでした。こゝに私が内職に草鞋を作つて賣りためた金が一圓あります。これでどうぞ入會させて下さい。」といふのであつた。その女は目いつぱいに涙をためてゐた。これを聞いた五百子が泣いたことは勿論である。

五百子は、その女が字が書けないといふので、代筆して入會申込書をこしらへてやつたが、その翌日は朝早く車夫の妻の家を訪ねた。そして「きのふは有難うございました。

有難う。

繰—操、噪、躁

物…者

贈—送

辭(辞)

考へやうでは、あなたのやうな心の美しい方に下さつたわけなので、私はそれをお取次するのです。

私は、あなたにお禮を言はねばどうしてもすまない氣がするので、忙しい中を繰合はせてお訪ねしました。これは東京を出る時、さる高貴の御方が、私の老體をいたはつて下さつた賜はり物ですが、これをあなたに差上げます。どうぞこれを着てお國のために働いて、立派な日本婦人になつて下さい。」と言つて、眞綿のはひつた一枚の肌着を贈つた。向うが驚いて辭退すると、「高貴の御方が私へ下さつたのも、考へやうでは、あなたのやうな心の美しい方に下さつたわけなので、私はそれをお取次するのです。どうか遠慮せずに受けて下さい。」と言つて、强ひて取らせた。

かういふ逸話は到るところに殘された。日露戰爭の時

に愛國婦人會は七十萬人の會員を有する大團體となつて國家的な働をした。五百子は出征軍人を慰問するため、自分で考案したカーキー色の筒袖に袴を穿ち、カーキー色のヘルメット帽を被つて滿洲へ赴いた。兵士は五百子の眞心をこめた慰問の言葉に感激した。五百子は旅順の二百三高地その他の砲臺に上つて戰死者の靈を弔うた。

明治三十九年の秋、五百子は愛國婦人會の立派な發達に安心して退隱した。その時九段の偕行社で、總裁宮殿下御台臨の下に、盛大な送別會が擧げられたが、五百子は一生の思出にと、謠曲船辨慶の一鎖を謠ひつゝ、日の丸の扇を開いてしづ〳〵と舞ひをさめた。その中には「功成り名遂げて

偕―階、楷
總裁宮殿下　閑院宮載仁親王妃智惠子殿下。
台―臺
をさめ

身退くは天の道と心得て」といふ陶朱公の心境をあらはした一節があつた。

婦人團體の母は、かうして全國民に惜しまれつゝ、自ら創立し發達させた愛國婦人會を退いた。そして一層惜しまれ歎かれつゝ、翌四十年の二月五日を以て京都帝國大學附屬病院の一室に逝いた。

一九　美しき國民性

芳賀矢一

氣候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉四季をりをりの風景はまことに美しい。かういふ國土の住民が現生活に執著するのは自然である。現世を愛し人生生活

芳賀矢一
國文學者　文學博士
昭和二年歿　年六十二
をり。
かういふ
著(着)

を樂しむ國民が、天地山川を愛し、自然にあこがれるのも當然である。

日本の娘の著物の模樣のはでやかなのは、西洋人の著書にも何時も歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、尙更これよりも綺麗である。自然に、衣服にもこれが染つて來る。昔のしのぶのすり衣、今の振袖模樣、裾模樣、つまりは、同じ事である。菊や、櫻や、梅や、牡丹を大きく染出した友禪縮緬や、繻珍の帶から下駄の鼻緒の先まで、自然界の草木花模樣で飾られてある。その色合の名稱でも、櫻色、桃色、山吹色、栗色、ぶだう色など、植物界から取つた名が多い。昔の女裝束は櫻重、梅重、山吹重など、重ねの色合は常に四季折々

歎＝嘆

しのぶのすり衣　陸奥國（福島縣）信夫郡にある石の面に絹布をあてて石のきめをすり出したもの。後世はしのぶ草ですり染する。稱（称）

言ふ。言はう。

をどし（緘）おもだか（澤瀉）

吹く風を云々　「吹く風を勿來の關と思へども道もせにちる山櫻かな」（千載集、源義家）

行暮れて云々　「行暮れて木の下かげを宿とせば花や今宵のあるじならまし」（平家物語、平忠度）

の花に因んであつた。裾には大海の景色を描き、腰には唐草を縫つてある。優しい女流の裝束は當然とも言はうが、武士の戰爭にいでたつ甲冑裝束にも、小櫻をどし、卯の花をどし、おもだかをどしなど、いかにも優美ではないか。總じて我が國の鎧甲冑は、當時の平服のはでやかなのに似合つて、いかにも美しいものであつた。それであるから「吹く風を勿來の關」と歌ひ、「行暮れて木の下かげを」と歌つても、よく似合ふので、西洋の蝦甲冑では似合ふものではない。

更に我等の日常がいかに植物及び自然界に關係を有するかを、食物の方面に見れば、春秋の彼岸の牡丹餅、お萩の名を第一として、菓子屋の目錄を一見して、一層その多い事が

わかる。松風、紅梅燒、磯松、桃山等の一般名稱は言ふまでもなく、櫻餅、鶯餅、柏餅の外、自然界の現象に取つたものでも、洲濱、時雨、越の雪、落雁、しほがま、さゞれ石などがある。名稱ばかりではない、形も花木に取るのが多い。干菓子は別して松の葉や、菊の花、すべて花木の形に作るのである。汁粉等も十二月に分けて、それ〴〵の雅名を附けてゐる所もある。

また下戸の領分ばかりでなく、酒にも櫻正宗がある。菊正宗がある。山川の白酒がある。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ゐられるが、魚類の料理もまた植物界、自然界とは離れぬ。刺身やすしには笹の葉を敷く。牡丹餅や赤飯を配るのに重箱に南天の葉を敷く。これは毒を消すとかい

用ゐ(ひ)

獨得

まじなひ
膳—繕
椀—碗
ヨーロッパ(歐羅巴)
伎倆(技倆)

ふまじなひから來たものでもあらうが、かしはでの名殘もあらう。料理の膳椀は金蒔繪で花木の形を裝飾とする。漆器、陶器一切の美術工藝品が草木花鳥の繪である事は、もとより言ふまでもない。それは裝飾美術として、近世のヨーロッパの美術に少からぬ影響を與へたものである。茶の湯のなつめなどは當然としても、俗に陶製の匙を蓮華と言ふなども優美である。

挿花の術、箱庭作り、盆景の山水、皆我が國人獨得の伎倆であつて、獨得の發達をしてゐる。繪畫では生き〴〵とした花木の色、禽鳥の飛動してゐるさまなど、西洋の靜物に馴れた目から見たら、珍しく感ずるに違ない。すべて花を活け

描く、畫かく

表す、表する

太田道灌　名は持資。戰國時代の武將。文明十八年（一四八六年）歿、年五十五。

るにも、それを描くにも、その生きたまゝに、自然のまゝにするのが美しい點である。枝からむしり取つて花ばかり挿しこむのは西洋の花瓶であるが、自然の枝振をそのまゝに、天地の配合よろしく表すのが、活花でも、盆栽でも日本人の長所である。日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解した者である。

四季の風光は一日も我が國民の頭から離れた事はない。この四季の景色と人事とを結び附けて感ずる事は、卽ちあはれを知るのである。源義家や平忠度が、いかにも日本武士として優にやさしく感じられるのは、このあはれを知るといふことがあつたからで、太田道灌に關する「みの一つだ

「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき」（後拾遺集、兼明親王）

恐らくは……あるまい。くらゐ。

になきぞかなしき」の話は、史實ではなくして傳說であらうが、歌を好んだ武士であるから、あゝいふ傳說が附いたのである。賴朝も、尊氏も、秀吉も暇のある時は風流の技をもてあそんだのである。風流といふ事、詩的といふ事の意味は自然に向つてのあこがれが、その大半を形作つてゐるのである。日本の武士道は、西洋の騎士道の如く婦人を崇拜せぬ代りに、自然の花を愛し、もののあはれを解したのである。

英雄豪傑ばかりではない、日本人程國民全體が詩人的なのは、恐らくは世界中にあるまい。歌心は誰にでもある。今日日本で歌を作る人はどのくらゐの數であらう。宮內省への毎年の詠進は何萬といふ數である。歌を作らない

上手でこそなけれ

處—所

盆栽いぢり

でも俳句を作る。どんな片田舎にも俳句の宗匠はゐる。神社奉納の額面は到る處に小詩人の名を列ねてゐる。短くて作り易い短詩形であるから、上手でこそなけれ、何人も作つて、花見、遊山の時にも一興とするのである。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、小詩人はまことに忙しいのである。悪事をはたらいて死刑に處せられる大悪人でも、死に臨んでは一首を口ずさむといふやうなのは、恐らくは他國にはない事であらう。我が國民は全國民を擧げて抒情詩人である、叙景詩人であると言つてもよいのである。

それ故我が國民は、隱居すれば盆栽いぢりをする。歌や

罪なくして云々

源顯基のこと。永承二年（一〇五七年）歿、年四十八。

昧—味

ほんたう

西行法師

鎌倉時代初期の歌僧。俗名は佐藤義清。建久元年（一一九〇年）寂、年七十三。

鴨長明

鎌倉時代の歌人法名蓮胤方丈記の著者。

深草の元政

江戸時代初期の隱者。寛文八年（一六六八年）歿、年四十六。

太田垣蓮月

京都の人。和歌諸藝を善くした。明治八年（一八七五年）歿、年八十五。

挿花に慰安を求める。昔は罪なくして配所の月を見たいと言ふ人も居たが、日本人が世の中を厭ふと言へば、風流三昧に日を送る。西洋で言ふ厭世は、ほんたうにこの世の中が厭になるので、自殺するより外に方法がない。日本人の厭世は人事社會がうるさいので、人事社會から遠ざかつて花鳥風月に近づけば、それで厭な思は無くなるのである。西行法師が世を遁れたと言つても、一生行脚して花月を樂しんでゐた。鴨長明も頻りに世の中を味氣なく思つたが、庵室にはいつて自然を樂しんで滿足してゐた。その他深草の元政上人でも、近い頃の太田垣蓮月でも、世の中に立交るのは厭でも、自然といふ樂地は別に有つたのである。

沼田頼輔
考古學者、紋章學者
文學博士
神奈川縣の人
昭和九年歿
年六十八
苗＝笛
紋＝絞

山内侯爵家
山内一豐を祖とする舊土佐藩主の家。

二〇　紋所の話

沼田頼輔（講演）

我が國では、家があれば苗字があります。そして苗字があれば必ず紋所があり、近頃は白襟黑紋附とも申す位で、禮服には必ず紋所を附けることになつて居りますが、さてその紋所に關する知識はといふと、由來は勿論、名前すら知られてゐない場合が澤山あります。

私は常にこれを遺憾として居りましたが、先年山内侯爵家の家史編纂を依頼されて居りました頃、同家で桐の替紋を用ゐて居られることについて、理解しかねて困つたことがありました。またその後、歐洲大戰爭の終らうとする時分に、大阪朝日新聞社から

さやう
紋所の研究に沒頭することになつた動機。

ベルギー國王に鶴丸の紋の附いた太刀を獻上する企があり、同社の海外特派員が、その紋所の由來につき邦人に尋ねたが解らなかつたため、英國の紋章學者に尋ねて、御下問の折の參考にしたといふことを聞き及んで、甚だ遺憾に思つたことがありました。さやうなことが動機となつて、私は紋所の研究に沒頭することになりましたが、その取調に基づき、我が國の紋章が、どういふ意味で用ゐられたかといふことについて、極めて大體のお話をして見たいと思ふのであります。

沼田頼輔

紋章の起原
我が國の紋章といふものは、本來武家時代に、或標章を旗や幕の目印として使つたのに始つたので、その結果武張つた意味を含んだ紋章が非常に多い。

公家―公卿

尚武的紋章
武家の旗印や幕の目印に由來する紋章。

我が國の紋章といふものは、本來、武家時代に、或標章を旗や幕の目印として使つたのに始つたので、その結果武張つた意味を含んだ紋章が非常に多いのであります。例へば劍酢漿草、劍葵、劍桔梗などいつて、劍を花の間に取合はせてゐるのがそれで、それのみならず兜の鍬形や、總角や、脛楯や、その他弓矢は勿論、武器に關するものは、悉く紋所に用ゐられて居るといつてもよいのであります。但しかういふ武張つた紋所は多く武家に用ゐられたので、お公家衆にはかやうな紋所を用ゐてゐるのが少しもありません。それ故私はこの種類の紋所を、尚武的紋章と申して居ります。

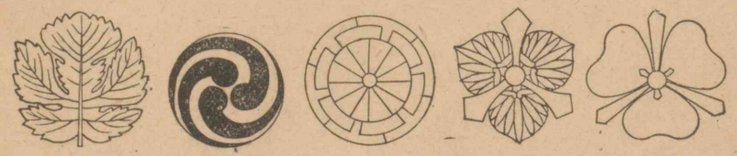
これを第一種として、第二種は、戰爭の際の功名手柄を後

記念的紋章
戰爭の際の功名手柄を後世に傳へるために作つた紋章。

德富蘇峰
文學者、歷史家。名は猪一郎。熊本の人。文久三年生。

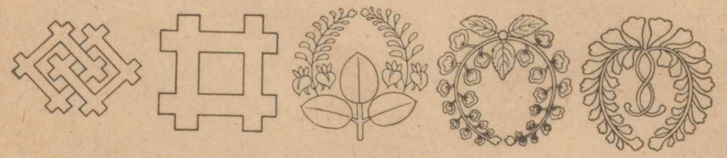
例…譬

參(參)



劍酢漿草　三劍葵　源氏車　那須の紋　平戸梶

世に傳へるために作つた紋章で、私はこれを記念的紋章と名づけて居ります。例へば德富蘇峰氏の紋所を見ますと、八角の中に巴が描かれてあります。八角といふのは、隅切の折敷と申して、神樣に供物を上げる時に用ゐるものであります、が、德富氏のお話に依りますと、氏の御先祖の方が、天草の戰爭の折に敵の大將の首を取られ、これを首實驗に供するために、隅切折敷に載せて大將の見參に備へられたことがあつた、それに因んでこの紋所を作られたといふことで、巴は昔から一つ頭、二つ頭などと呼んだもの



九條藤　内藤藤　上り藤　井筒　違井筒

ですから、これを敵將の首に擬へ、折敷に組み合はせて、新しい紋所を組み立てたといふことは、いかにも武家に相應はしい話であります。かういふ種類の紋所は他にも澤山あつて、例へば關ケ原の合戰に、土佐の樫井といふ士が、敵將の首を取つた記念に、生首を紋所にしたといふ例もありました。源平屋島の戰に那須與一が平家の扇を射落した、その晴れやかな功名を偲ぶために、その子孫の中には、日の丸の扇を紋所に用ゐてゐるものがあるといふ事であります。

第三種は私が指示的紋章と名づけてゐるもの

指示的紋章
苗字に因んだ紋章

重菊　菊（實相院菊）　菊水　鳥居に大の字　大の字重ね　七五桐

ので、概して苗字に因んだものであります。例へば、吉野といふ苗字の者が櫻の花を紋所にし、堀井、酒井、駒井、井伊、澤井などいふ井の字の附く苗字の者が、井の字、或は井桁、井筒などを用ゐる類で、これらはその紋所を見て、これが何家の紋所かといふことがすぐに指示されるやうに作られたものであります。近藤、遠藤、伊藤、佐藤、加藤、工藤、内藤などいふ苗字の家が、比較的多く藤の紋所を用ゐてゐるのも、この種類に屬します。藤の紋所については藤原氏から出た家が用ゐるといふやうな説もありますが、全くの誤で、そ

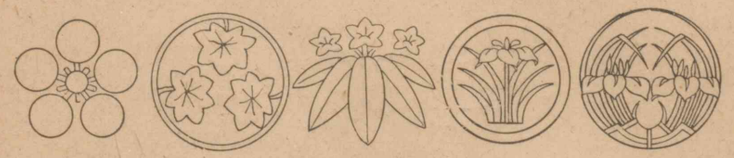
屬（屬）

雲上明覽　帝室、皇族、公華等の世系、氏族、紋章等の書。編者不詳

據（拠）

瑞祥的紋章　めでたいことに因んだ紋章。

瑞―端、喘、揣



抱杜若　立杜若　龍膽　三楓　瓜實梅鉢

れは、雲上明覽といふ書物に據ると、藤原氏から出た公家が總計九十七軒あつて、その中藤の紋を用ゐてゐるものが僅か七家だけであるのを見てもわかります。

第四種は瑞祥的紋章ともいふべきものであります。これは息災延命、福德圓滿、子孫繁昌など、俗にいふ緣起のよい事に因んで工夫されたもので、大別すると文字と繪模樣との二いろがあり、文字の方では、指事の意義を離れて、天、長、大、福、吉、利等の目出たい文字を用ゐたのは、すべてこれに屬します。石田氏、山内氏などに用ゐら

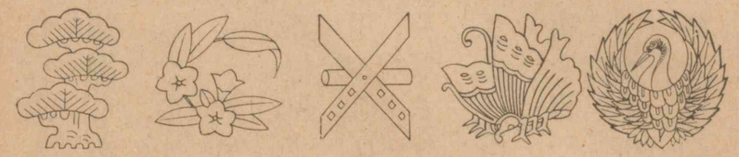
菊花の御紋章は瑞祥中の瑞祥。

重陽の嘉節　陰曆九月九日の菊の節句。九は陽數の最上位で九月九日はその陽數の重複である。

れた大吉、大一、大万の六字を寄せ集めた紋章などはその最適例でありませう。繪模樣の方も同じく指事の意義を離れたのが皆これに屬するので、その第一に擧ぐべきは、畏くも皇室の御紋章の菊花であります。これは花の姿が端正優雅で氣品が高い上に、延命の瑞草として重陽の嘉節に用ゐられるのに因んだので、誠に瑞祥中の瑞祥と申すべきものであります。また桐の紋はこの木に靈鳥鳳凰が棲むことに因んだのであり、楠氏の菊水は、菊の下水（したみづ）を掬んで長壽を保つといふ支那の古傳說に據つたのであります。その他、千年の齡にあやかる意で鶴を用ゐ、萬歲の壽を祝つて龜を用ゐるなど、その數の多いことは、さすがに緣起を好む

尙美的紋章
公家の家々にて裝飾に用ゐた文様を紋所にしたもの。

萬＝万
龜（亀）



鶴　揚羽の蝶　千木勝魚木　枝龍膽　三蓋松

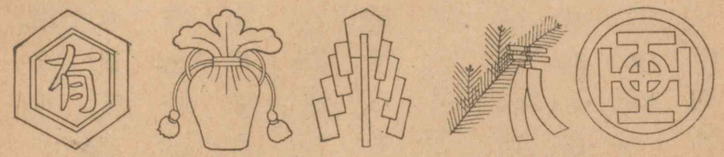
人間の心理を現して居ります。

第五種は尙美的紋章で、これは多くお公家さんの家に用ゐられました。お公家さんには家家によつて、衣裳や車などの裝飾に、代々極つて用ゐられた文様がありましたが、それを紋所にしたのがこれであります。例へば、花山院家の杜若、今出川家の楓、或は久我家の龍膽の如きは、いづれも車や着物の文様として用ゐられたものが、後世紋所が行はれるやうになつてから、その方面に轉用されたものであります。これらの紋所は、もと單に美しいといふ好みによつて

信仰的紋章
信仰の意味から用ゐた紋章。

クロッス
十字架。

中川清秀
信長に仕へた武將。天正十一年（一五八三）戰死、年四十二。



中川クルス　祇園守　一幣　一瓶子　有字紋

用ゐ始められたものでありますから、尙美的紋章といふべきもので、それは概して文様から移つて來たものでありました。

第六種は信仰の意味から用ゐられたもの、卽ち信仰的紋章ともいふべきもので、これには隨分澤山の種類があります。例へば戰國時代にはキリスト教が盛んに行はれたので、この教を信ずる者は、多くクロッスを紋所と致しました。その一例を擧げると、有名な賤ヶ岳の戰に討死をした中川清秀は、當時の名高いキリスト教信者でありました。それ故、その子孫は、今でも「中

祇—祇

祿—祿

潛(潛)

抵—抵、低、底

川クルス」と稱して、パテント・クルスといふものを用ゐて居ります。備前の岡山、因幡の鳥取、この兩池田侯爵家は祇園守といふ紋所を用ゐて居りますが、これはキリスト教のアンドリュー・クルスから出たものであります。御承知の如く島原の亂以來、キリスト教は嚴しい國禁となつて、これを信ずるものは、大名でも、士でも、或は死刑に處せられ、或は家祿を召し上げられるといふやうなことになつて、この教に關係のあるものは、片端からその影を潛めましたが、それにも拘らず、戰國時代にキリスト教を信じた大名の子孫は、大抵クロッス系統の紋を用ゐて居りました。

信仰的紋章の中では、神樣に關係したものが比較的澤山

幣—弊

趙州無字
禪宗公案の一。唐の趙州觀音院從諗禪師が或僧から「狗子に佛性ありや」と問はれた時「無」と答へた。これは有無を超越した無であつて、こゝに意味深長な禪の奧義があるといはれ、有名な話になつてゐる。

神社にも社紋といつて極つた紋所が用ゐてゐるのがある。

あります。例へば鳥居、瑞籬、欄干、御幣、額、瓶子、千木、鰹木など、苟も神社に關係のあるものは概ね紋所に用ゐられて、さすがに日本は神の國だと思はれます。これに反して佛教關係の紋所は多くありませんが、これは神道の現世的なるに反して、佛教が超現世的なるに本づくのでありませう。仙石子爵の紋所が「無」の字を用ゐてゐるのは、禪宗の「趙州無字」といふ故事から來たので、少い例の一つであります。

我々の家に紋所があるやうに、神社にもまた社紋といつて、極つた紋所を用ゐてゐるのがあります。例へば、天滿宮の梅鉢の紋、諏訪神社の梶の葉の紋、八幡宮の巴の紋、出雲大社の龜甲に「有」の字の紋の如きが、それであります。出雲で

大國主尊　素盞嗚尊の御子。また御孫ともいひ、出雲大社の祭神。大己貴神、八千矛神、國造大神ともいはれる。

「有」の字を用ゐるのは、社傳に據ると、出雲では、祭神の大國主尊が杵築に鎭座せられたのが十月であつたといふので、この月を鎭座月と申して居りますが、十月の二字を組み合はせると「有」の字になるので、それを神紋に定めたのであると申します。

とにかく我が國では、家にも神社にも定まつた紋章があつて、それに歷史的精神的の重大なる意義があるのでありますから、紋所の研究がその方面の關係學に取つて大切であるばかりでなく、これについて一通りの知識と趣味とを持つことは、修養ある國民の一種の嗜みともいふべきでありませう。

西澤笛畝　畫家　人形研究家　名は昂一　東京の人　明治二十二年生

逐―遂

二一　雛人形

西澤笛畝

近頃は、節分の豆まきが濟むか濟まぬに、早くも雛人形賣出しの聲を聞く。しかもこの人形行事が年を逐うて盛大に赴くことは驚くばかりで、新考案に成る珍しい雛の數々が、年一年に取材の妙を誇り、新奇を競ふといふ有樣である。この古俗の復活發展はまことに悅ぶべき流行ではあるが、しかしながら餘りに新奇を競うて、雛そのものの本質を沒却したものや、品位のない際物を作ることは避けたいものと思ふ。

元來雛は、我々人間の雛形で、小さいながら人間に似寄つ

たその雛形が、本尊の人間に代つてすべての災厄を引受けてくれるといふ、大切な役目を持つてゐるのであつた。そしてかやうな深い意味を持つてゐるだけ、その製作には特に敬虔な心を以てしたものである。一體大昔の雛は、男も女も殆ど同形のものであつたが、人智の進むにつれて、男は男らしく、女は女らしくといふ自然の要求から、段々性別の特色を現すやうになり、それが次第に精巧に赴いて、遂に今日謂ふ立雛が出現したのである。また並べ方も、古くは別に男女を一組にすると限つたわけではなく、姉

雛遊の圖

敬虔な心。

雛人形いろ〳〵（西澤笛畝藏並びに選）

吉野雛（足利時代）

次郎左衛門雛（享保時代）

立雛（徳川時代文政期）

古雛（室町時代）

敬虔な心。

たその雛形が、本尊の人間に代つてすべての災厄を引受けてくれるといふ、大切な役目を持つてゐるのであつた。そしてかやうな深い意味を持つてゐるだけ、その製作には特に敬虔な心を以てしたものである。一體大昔の雛は、男も女も殆ど同形のものであつたが、人智の進むにつれて、男は男らしく、女は女らしくといふ自然の要求から、段々性別の特色を現すやうになり、それが次第に精巧に赴いて、遂に今日謂ふ立雛が出現したのである。また並べ方も、古くは別に男女を一組にすると限つたわけではなく、姉

雛遊の圖

（選に洩れた新入雛）

雛　古

（什時町蓋）

雛　立

（文政時川崎）

雛　吉

（什時紙屋）

雛　吉

（什時栄章）

雛　門　藩　主　殿　本

松と藤の花と

松の剛と藤の花の柔とを以てそれぞれに男女の特性を現し、日本婦人の特殊な性情を表現する。

袴―袴、跨

冴え。

様人形などと同じやうに、必要に應じて自由に造り出されたものであつた。　またこれを飾る季節についても、今日のやうに三月三日に限るといふのではなく、時に應じ折に觸れて飾られ祭られてゐたのであつた。

立雛の模様には、一番多く松と藤の花とがあしらはれてゐる。これは松の剛と藤の花の柔とを以てそれ〴〵に男女の特性を現したので、「松によりそふ藤の花」といふ風情によつて、日本婦人の特殊な性情を表現したのであつた。　また袴につけた菊の模様は、延命の花のゆかりを利かせたものといはれてゐる。　いづれにしてもその配合の美しく優雅なところは、考案者の趣味の高さと技術の冴えとを示し

足利時代は立雛から座雛に移る推移期。

徳川時代には雛祭の先驅をなす雛遊が盛んに行はれ出して來た。

たものであつた。

しかしこの立雛もいつしか滿足されぬやうになつて、もつと本物の人間に近い形のものを得たいといふ要求が次第に起つて來た。この要求の具體化されたのが足利時代の末期からで、室町雛と稱する、袖を張つて端坐した姿のや、吉野雛と呼ぶ神像風に立つてゐるものなどが、この期に出でて、立雛と座雛との中間に位する推移期を代表した。

その中に時勢が一轉して徳川時代となり、四海波靜かにして四民が平和な生活を樂しむやうになると、雛祭の先驅をなす謂はゆる雛遊が盛んに行はれ出して來た。その雛遊に飾られて主位を占めたのが謂はゆる座雛で、寛永雛は、

享保雛は雛人形としての形式を完全に備へた第一歩の實例。

その最も古いものであり、同時に今日に殘存する古雛の中でも殊に貴重なものである。

寛永の頃からは段々と雛の新考案、新製作が試みられて世人を喜ばし、次第に今日の隆盛を來したのであるが、享保頃には謂はゆる享保雛が作り出されて、雛人形としての一種の形式を完全に備へた第一歩の實例が示された。享保雛は、綿密な考證によつて姿貌の十分に整へられた非常に優雅なもので、いづれの點から見ても極めて尊重すべきものである。

その頃次郎左衞門といふ名工が出たが、彼の作にかゝる立雛、座雛は、いづれも趣味の高雅なもので、衣裳の着附など

豐（―豊）
鉤（鈎）―釣、
鈎

文化文政期には雛人形に寫生味が加り、天保頃には更に多く自然味が取入れられた。

複―復

には殊によく注意して、後代の模範とすべきものであつた。殊にこの人形の特徴は、顔面の丸く豐かに、しかもかの藤原期の扇面古寫經等に見る引目、鉤鼻といふ溫雅な風格を有つてゐる點で、これは當時專ら行はれた寫生風の顔面製作法に比して一段の味はひを發揮してゐるものである。

それから下つて文化文政期の頃になると、雛人形の上にも段々と寫生味が加つて、顔面も表情的になつて來たが、天保頃には更に多く自然味を取入れ、在來の描目に對して、玉目細工を應用するまでに變つて來た。同時に雛飾の形式の上にも年一年と複雜味を加へ、雛の外に謂はゆる御道具類を數多く添へることになつて來た。

遇―偶、隅

二十七八年戰役
日清戰爭（一八九四―一八九五）

それからが明治で、あの維新の大變動につれて、さしも盛んであつた人形祭の風流行事も一時は殆ど姿を消して、立派な雛人形が二束三文に賣り捨てられる悲運に遭遇したが、二十年頃から、國粹保存主義の勃興につれて、五節句復活論が唱へられ、その影響を受けて、雛祭の風雅な遊がまづ人人に思ひ出されるやうになつた。かくして最初に芽を吹いたのが三月の節句の雛で、これが昔以上に少女たちから可愛がられ、續いて二十七八年戰役の大捷が男の子の人形祭である五月の節句の復活を喚び起して、二つともに昔に劣らぬ盛大を見るやうになつた。のみならず今日では、日本の雛祭が、一躍世界的のものとなり、青い眼の人形が我が

可愛い工藝人形が國交上の大使命を遂行する。

愉—諭、喩、輸
快—快

大島義脩　教育家、前女子學習院長。兵庫縣の人。昭和十年歿、六十五。

皇后陛下が御學問所で御修學中親しく御進講申し上げた。

久邇宮邦彦王　昭和四年薨、御年五十七。

仰ぎ奉る　生れさせ給ひ　拜受せられ　あらせられ

雛段に飾られ、黑い眼の人形が歐米に渡つて、あの可愛い工藝人形が國交上の大使命を遂行するやうになつたのは、實に愉快な現象といはなければならぬ。

二二　御修學時代の皇后陛下

大島義脩

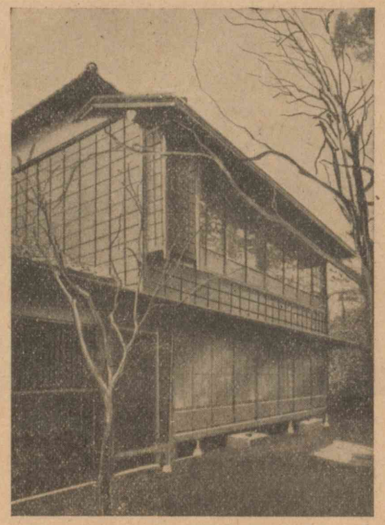
畏くも我等の國母と仰ぎ奉る皇后陛下は、久邇宮邦彦王の第一の姫宮として生れさせ給ひ、大正七年一月十四日、御齡十六の時、將來東宮妃と定められる御沙汰を拜受せられました。その頃姫宮樣には學習院女學部に御在學あそばされ、民間の子女と共に中等科第三學年御修業中であらせられましたが、右の御沙汰が降りますと、間もなく御退學あ

御退學あそばされ

御邸内　久邇宮御邸内。宮家は澁谷區宮代町所在。

續けさせられを

そばされ、新たに御邸内に設けられた御學問所に於て御修學を續けさせられました。やがて五年程度の高等女學校の學科ををへさせられまして更に三學年、高等の學業に就かせられ、それ〴〵專門の講師を召して、普通女性に必要とする課程の外、將來至高の御身分にふさはしい特別の御修養御學業を積ませられました。そのお忙しい中にも、書道、繪畫、音樂、茶道、花道などの技藝をお磨きあそばされ、殊に御體育に就いては、御兩親の宮樣の思召



御學問所側面
（東京府立第三高等女學校）

姫—姫

を體せられ、とりわけ御心を用ゐさせられた由に承つてをります。かやうに高い博い教育を受けさせられました事は、これまでの日本女性にはたぐひ稀な事で、まことに貴くありがたい事であります。

御學問所内部

その頃の姫宮様のけだかく麗しい御姿、生き〳〵として御行儀正しい御ふるまひ、御優しくつゝましやかな御言葉づかひは今、陛下として拜し奉る神々しさを、既にその頃から御身に備

聰—總

見そなはせられて

へさせ給うたのであります。中にも我等の深く感じましたのは、物事の御理解に敏く、しつかりと要點を捉へさせられる御賢さと、同時に小さい事を忽がせにせず、隅々に行き渡る御注意の細やかさとで、御聰明は拭ひすましたる鏡のやうに照り輝くのを覺えたことであります。

御學業と並んで正課の體操を規則正しくあそばされました外、運動としてテニス、ピンポンなど、御學友をお相手に鮮かな御競技ぶりを示されました。また徒歩御登山の事などありまして、男子も及ばぬ御健脚で、常に先頭に立たれ、お供の者の、疲れを見そなはせられて、御微笑をたゝへていたはらせられるなど、ありがたい事でありました。總じて

わたらせられ

祀―祭

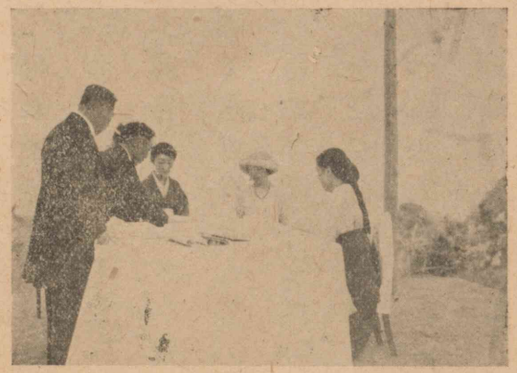
お見上げ申さぬ

御動作の常に快活敏捷にわたらせられたのは、本來御强健なる御體質の上に、かうした御運動によつて得させられたものと思ひます。

久邇宮家では敬神崇祖の思召篤く、御邸内の一區を淨めて、其所に皇大神宮と、お祖先以來御歷代のみたまとを祀られてあります。この御祠に朝ごとの歩みを運ばせられ、額づき拜み給ふ花の御姿をお見上げ申さぬ日とてはなく、霜の日、雪の曉、一度も怠らせ給うた事はなかつたと承ります。

御學問所のお庭にはさゝやかな花壇と菜園とを設けさせられ、四季の花もの、畑ものを作らせられましたが、專ら御自身のお樂しみとあそばされるのではなく、時をり〳〵の

拜しました



地方御見學中の陛下

美しい花、新しい野菜を、御兩親の宮樣に捧げられて御慰め申され、また御共々に御膳に上せられて、御團欒の興を添へさせられるのでありました。少女心にふさはしい御孝養の一端と拜しました。

おそばに仕へ奉る者に對し、お優しい御心遣はもつたいない程で、傳へ聞いても感涙に咽ぶばかりであります。今、御學友の思出話から二つ三つを拾つて見ませう。

「前後五年の長い御奉仕の間に、たゞの一度でも、どんな事

卻(却)

思し召され

があつても御不快げな御樣子を拜した事はありません。御間近にをりますと、家庭にゐる時よりも卻つて明るい晴れやかな氣分になりますので、毎日の出仕が待遠しい程でありました。

「或日、早朝の雪を冒して出仕いたしますと、直ちに御座近く召されまして、『これは身内が溫まるさうだから。』と、お言葉を添へて、だい〳〵湯を賜はりました。途中の寒さを思し召され、お庭先の樹の實を採らせて、お待ち受けあそばされたと承りました。お湯の暖かさにもまして、お情の厚さに寒氣を忘れました。」

「御日課の餘暇御くつろぎの時、御談笑のうちに、ふと誕生

留…

うかゞはれて

赤倉　新潟縣中頸城郡名香山村。

いらせられましたが

日に就いてお尋ねを蒙りまして、何心なくお答へ申し上げましたところ、よく御記憶に留めさせられ、當日に至り思ひがけなくお祝の品を賜はりましたので、先の心ないお答を恥ぢ恐れ入りました。」

このやうなお話を擧げますと、限りもなく盡きないのでありますが、御心ばへの美しさは、些細な事の端にもうかゞはれて、忝い極みであります。

大正十二年に、かの恐しい震災が關東地方を襲うた時、幸にも久邇宮御一門は赤倉の御別邸に御滯在でいらせられましたが、すぐに東京にお使を遣され、當時講師であつた筆者の宅にまでも、御見舞のお言葉を傳へさせられました。

……於かせられても　聞し召され　伸ばさせられました

赤倉に於かせられても、日ごとに增す避難者の氣の毒なさまを聞し召され、御母宮樣、御妹宮樣と共々、二三の侍女をお相手に御手づから針を運ばせられ、男物、女物、子供物各五十枚づつの衣類を仕立てられ、避難者に頒ち賜はるやう御沙汰がありました。

かうした御慈愛の御手は、遂に小鳥の上にまでも伸ばさせられました。御學問所に一羽の鳩を飼はれまして、そのお世話を、まことに御辛抱强く、御親切にこまゞとあそばされ、お氣長に馴らされました。鳩も次第におなつき申して、終には御髮や御肩に上つたり、御掌から豆を啄んだりするやうになりました。御學習の時間、御緣を隔てて手摺に

御入內　御出でまし　雲居の宮高く萬民に臨ませ給ふ。　民草を憐み給ふ。　拜察いたします

とまり、懷かしげに內をのぞいてゐる風情は、あはれに愛らしいものでありました。愈妃殿下として御入內の日、御出でましの御車の上を幾たびか舞翔り、御名殘を惜しむ樣子は、見る者の眼に露を宿させたと語り傳へてをります。

今、雲居の宮高く萬民に臨ませ給ふ皇后陛下の御修學時代を顧み奉りますと、まことに「旃檀は二葉より香し。」の喩の通りであります。主上に奉仕し給ふ御坤德、皇子皇女を撫育し給ふ御慈愛、民草を憐み給ふ御仁惠、いづれも天資に出でさせ給ふのではありますが、また御敎養の深く博いのにもよる事と拜察いたします。天成の玉も磨かれてこそ光を四方に放つと申すべきでありませう。

三木露風
詩人
名は操
兵庫縣の人、明治二十二年生。

萠えよ。

二三 春の草

三木露風

萠えよ、萠えよ、春の草。
生ひよ、生ひよ、野邊の草。
あたらしき夢をはぐくみて、
春のいのちをのばせかし。

ながき眠の冬の土、
いつしか覺めてよみがへり、
芽をふく千草八千ぐさの、

生の力の不思議さよ。

小川の水はぬるみたり。
日は晴れ空は薄がすみ、
つぐみや、ひわや、鶯や、
さやかにあそぶ彌生月。

萠えよ、萠えよ、春の草。
生ひよ、生ひよ、野邊の草。
綠のしとねをしきつらね、
若きいのちを飾れかし。

（『青き樹かげ』）

長谷川二葉亭
明治の小説家
名は辰之助
名古屋の人
明治四十二年
（一九〇九）歿、年四十八

宵の口から寐てしまふ。

大鋸で大丸太を挽き割るやうな音だ。

二四　愛犬ポチ

長谷川二葉亭

嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶ひ出すのはポチのことだ。

春雨のしと〳〵と降る薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り宵の口から寐てしまつたが、ふと目を覺ますと、耳元近くに妙な音がする。ゴウといふかとすれば、スウと、或は高く、或は低く、單調ながら拍子を取つて、さながら大鋸で大丸太を挽き割るやうな音だ。

私は夜中に滅多に目を覺ましたことがないから、初はひどくびつくりしたが、能く研究してみると、なに、父の鼾なので、やつと安心して、そのまゝ再び眠らうとしたが、どうもそれが耳について寐つかれない。仕方がないから、聞えるままにその音に聽き入つてゐると、いつからとなく囃子の手が込んで來て、合の手に遠くで微かにキャン〳〵といふやうな音が聞える。鼾が凄じい時には、それに氣壓されて聞えぬが、鼾が低くなるとはつきりと手に取るやうに聞える。不思議に思つて益耳を澄ましてゐると、次第に大きく、高くなつて、遂には鼾とは離れ〴〵に確かに門前に聞える。

かうなつて見ると、疑もなく小狗の啼き聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、けたゝましくキャン〳〵と啼き立てる、その聲尻がやがてかぼそく悲しげになつて、めいるやうに遠い〳〵所へ消えて行く、—かとすれば、忽ちまた近く

囃子の手が込んで來る。

手に取るやうに聞える。

聞…聽

聲尻がやがてかぼそく悲しげになつて、めいるやうに遠い〳〵所へ消えて行く。

こわじりこゑ。

で、堪へ切れぬやうに啼き出して、クン〳〵と鼻を鳴らすやうな時もあり、ギャオと欠伸をするやうな時もある。

私はそつと夜着の中から首を出して、

「小さい狗の聲だねえ。どうしたんだらう？」

と、うるさく母にきくと、母はやさしく、どこかの人が棄てた狗であらうと、一々説明してくれて「もう晩いから默つてお寐。」とやさしく言つて、あちらを向いてしまつた。私もまた夜着をかぶつた。狗は門前を去つたのか、啼き聲がやゝ遠くなるにつれて、父の鼾がまたうるさく耳につく。寐られぬまゝに、私は夜着の中で棄狗の有樣を繰返し〳〵考へた。まづどこかの飼犬が緣の下で兒を生んだとする。ち

ドサリと横になる。コロ〳〵と轉がる。ヨチヨチと這ひ寄る。

小さいから舌の先でたあいもなくコロ〳〵と轉がされる。

さわぎあわて

鼻面で割り込んで來る。

つぽけな、むく〳〵したのが、重なり合つて首を擡げて乳房を探してゐるところへ、親犬が餘所から歸つて來て、その側へドサリと横になり、片端から抱へ込んで舐めると、小さいから舌の先でたあいもなくコロ〳〵と轉がされる。轉がされては大騷して起き返り、またヨチ〳〵と這ひ寄つて、ポツチリと黑い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、あわてて吸ひついて、小さな兩手で揉み立て揉み立て吸ひ出すと、甘い溫かな乳汁が出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何ともいへずおいしい。と、腋の下からまだ乳首にありつかぬ兄弟が鼻面で割り込んで來る。取られまいとして、產毛の生えた腕を突張り大騷やつてみるが、

お腹もくちくなり。

ついうとと〳〵となると、含んだ乳首が脱けさうになる。

とう〳〵取られてしまひ、またそこらを尋ねて他の乳首に吸ひつく。そのうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も溫まつて、溶けさうな好い心地になり、ついうとうととなると、含んだ乳首が脱けさうになる。夢心持にもあわててまた吸ひついて、一しきり吸ひ立てるが、ぢきにまたたあいなくうと〳〵となつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。その時忽ち暗闇か

長谷川二葉亭

忽ち暗闇から大きな腕がヌツと出て、正體なく寐入つてゐる所を無手と引つ掴み、宙に吊す。

やう

ぷう

雨に打たれて、見る間に濡れしよぼたれ、怖しく寒くなる。よち〳〵と這ひ出す。

ら大きな腕がヌツと出て、正體なく寐入つてゐる所を無手と引つ掴み、宙に吊す。驚いて目をボツチリ明き、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがく中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が塞りさうだから、出ようとするが出られない。暫くもがいてゐる中に、ふと足搔が自由になる。と、領元を撮まれて、高い〳〵所からどさりと落された。うろ〳〵してそこらを視廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な所で誰もゐない。茫然としてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよぼたれ、怖しく寒くなる。身慄ひ一つして、クン〳〵と親を呼んでみるが、どこからも出て來ない。途方に暮れて、よち〳〵と這ひ出し、

夜中をただ獨り、溫かな親の乳房を慕つて悲しげに啼き廻る、その聲が、さつき一度門前へ來て、またどこへかさまよつて行つたやうだつたが、それがいつかまた戻つて來て、どこをどう潛り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

私はたまらなくなつて、母に賴んで、この小狗に食物を與へて、一晩泊めてやることにした。犬嫌ひの父は泊めたその夜を啼き明かされると、うんざりしてしまつて、あくる日は是非逐ひ出すと言ひ出したから、私は小狗を抱いて逃げ廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顏をしてゐたが、しかしそれも一時のことで、その中に小狗も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなると、逐ひ出す筈の者に、いつしかポチ

うんざりして。
逐—遂

といふ名までつけて、姿が見えぬと、父までが一しよに搜すやうになつてしまつた。

朝起きて緣側に出る。私の聲を聞きつけると、ポチはどこにゐても一目散に飛んで來る。急いで庭へ降りると、ポチが透かさず泥足で飛びつく。細い人參ほどの赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立つて、嬉しさうに面を見上げる。見おろす。目と目とがぴつたりと合ふ。たまらなくなつて私が横抱きに引んだく。ポチは抱かれながら、身をもがいて大あばれに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、顋や頰までも舐める。父が顏を顰めて、穢い〳〵といふ。成程考へて見れば、穢いやうではあるけれども、しかし私は嬉しい、止められ

一目散に飛んで來る。
細い人參ほどの赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立つて、嬉しさうに面を見上げる。見おろす。目と目とがぴつたりと合ふ。たまらなくなつて私が横抱きに引んだく。

ない。どうしてこれが止められるもんか。私が何も好い物を持つてゐるぢやないし、ポチもそれは承知ですることだ。利害の念を離れてゐるのだ。たゞ懷かしいといふ刹那の心になつてゐるのだ。毎朝これでは着物がたまらないと、母はそれをこぼすけれど、着物なんぞの穢れを厭つてポチのこの志を無にすることは出來た話でない。（平凡）

志を無にすることは出來た話でない。

下田歌子
教育家
實踐高等女學校長
岐阜縣の人
昭和十一年歿
年八十一

二五　世界無二の我が國體

下田歌子

國體によつて名こそ異なれ、世界の各國いづれも一種の支配者を有つてゐるのでありますが、日本國民ほど立派な君主を奉戴してゐる國民はありません。そして我が大日本帝國が世界に對して最大無上の誇とする所は、この上に萬世一系の天皇を戴いてゐるといふ點であります。

日本帝國が世界に對して最大無上の誇とする處は、上に萬世一系の天皇を戴いてゐるといふ點である。

富も兵も文明も、國の成立上極めて大切なものでありますけれども、それらは漸次に增加し、改善し、發達させることが出來ませう。美術工藝の方面に於ても、世界各國にそれ〴〵至寶とも稱すべきものが、昔から澤山ありますけれども、これとて天才の努力次第で、昔に立ち勝つた

下田歌子

三千年に近い歴史が自然に作つた國家と皇統とは、世界のいづれの國も絶對に眞似ることの出來ないものであります。

ものが製作されぬとは限りません。　これらは凡て、人力によつて、短日月の間にすら、隨分長足の進歩を見せることも出來ますが、しかしながら、三千年に近い歴史が自然に作つた國家と皇統とは、世界のいづれの國も絶對に眞似ることの出來ないものであります。　たとひ今日以後に三千年一系の國體を作る國があらうとも、その場合に、我が國は六千年一系の國として先驅するでありませう。　卽ち我が日本國民は、世界永遠の歴史の上に於て、永久に萬世一系の皇統を戴き奉るといふ絶大の名譽を荷つてゐるのであります。

更に國家と皇室との關係を見ますと、この點に於ても、我が國は卓然として諸外國に超絶する特徴を有つてをりま

外國では自國の君主を他國の皇室から迎へたり、自分等と同格なる人民の中から、皇帝や大統領を選んだりする。

す。　外國の例を見ますと、新しい國家の成立つに當つては、必ず民族と民族との間に、國と國との間に、政府と國民との間に、或は人民同志の間に、激烈な鬪爭が起つて、非常な慘劇が行はれました。　彼等の間には必ず壓服者と被壓服者とがあつて、自國の君主を他國の皇室から迎へ、或は、自分等と同格なる人民の中から、皇帝や大統領を選むといふ結果になりますから、その間には自然に忠誠の念の厚からざる嫌があり、隨つて、たゞ時代の推移が漸次反抗の力を弱め、反感の情を薄めて、幸に政府の施政が良ければ、親の代よりは子の代、子の代よりは孫の代と、治者被治者の間に少しづつ溫かさを加へるだけであります。

君國一體。
君臣同祖。

日本の皇室と國家と國民とは、この點に於て、最初から成立を異にしてをります。一言にして盡くせば君國一體、君臣同祖の國なので、いひかへれば國家は卽ち天皇、天皇は卽ち國家であり、さうして私ども人民は、畏れ多いことながら天皇の御先祖と同じ御先祖を有つてゐるのであります。外國の皇室は國家があつて後に起つたので、日本の皇室は國家よりも先にあり、そして、國家が皇室によつて起つたといつてよいのであります。隨つて日本の國民は、實に一家族の發達したもので、その家族の中の宗家に當らせられるのが、我が皇室であらせられるのであります。昔の源氏といひ平氏と申しましたものも、皆、淸和とか宇多とか嵯峨とか稱へ奉つた天皇の御裔でありました。そして私どもは更にそれらの末なのであります。卽ち最初に皇室があり、住民があつて、玆に國家が出來たのでありますから、我が日本は、その國民に殆

今上陛下

皇后陛下

日本の國民は、一家族の發達したもので、我が皇室はその家族の中の宗家に當らせられる。

日本の國民は、悉く皇室の忠良なる臣民である。

ど異分子を含まぬといつてもよい程に純一な國家であります。

それ故日本の國民は、悉く皇室の忠良なる臣民であります。外國では、同じく帝王を戴く國民であつても、その悉くが必ずしもその王家帝室の忠良なる國民とはいはれません。共和國では、大統領が寧ろ國民の忠良なる公僕として働くのであります。

かう見て來ると、國家と皇室と國民とが、その歴史の上に於て、またその感情の點に於て、日本の如くしつくりと一致した國が、世界いづれの處にありませう。こゝにこそ日本の國家統一が行はれ易い根據があるのであります。我が

秩序整然なる統一體。

辛うじて

國家は、國民が別に骨を折つて統一するまでもなく、皇室を中心として自然に秩序整然と統一されてゐるのであります。皇室に忠を盡くすといふことを第一の條件とすれば、それがやがて國家に義務を盡くすことになり、國家に義務を盡くせば、やがてそれが皇室に對する忠誠となるのであります。

外國には、國家國民の中心となるべき萬世一系の皇室がありません。彼等の中には國民各自生存の必要上、國家に忠誠を示さないことすらありました。また萬人に共通する宗教の力を借りて、辛うじて國民を統一和合せしめた時代さへもありました。これが外國の歴史に於て、宗教が大

きな勢力をなした理由の一つであります。

然るに我が國に於ては、皇室中心の思想が國民精神の根柢に大磐石の如く基礎を据ゑて居り、しかも宗教以上の信仰となつて居ります。私ども日本國民は、よく我が國家本來の成立と愛國心の眞義とを理解して、この世界無二の國體を愛護するといふ國民第一の義務を忘れないやうにせねばなりません。

純正女子國語讀本　卷二終

昭和十二年七月二十五日印刷
昭和十二年七月二十八日發行
昭和十三年一月二十五日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十八日訂正再版發行

純正女子國語讀本改訂版
各卷定價金六十錢

文部省ノ御指示ニヨリ昭和十三年六月一日一部修正

編纂者　五十嵐力
發行者　東京市牛込區原町二丁目四十六番地　山田謙吉
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　五十嵐良晃

◆發行所　東京市牛込區原町二ノ四六　早稲田圖書出版社　振替東京一三六一五三番
◆關西特約販賣所　大阪市東區北久太郎町四ノ一六　合資會社　柳原書店

大日本印刷株式會社麻布工場印刷

不許複製

一ノ三組
川市砂麗子